

バリアフリースターセンターの設立について (VI) † ーカムイ大雪バリアフリースターセンターー

伊 藤 薫*

概 要

本研究の研究課題は、「カムイ大雪バリアフリースターセンターの設立の経緯と特徴を記録すること」である。

2005年の旭川におけるトリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表選考合宿の開催には異業種交流の企業が大いに協力し、2006年にトリノパラリンピック写真展を契機に車いす紅連隊は誕生した。2006年度から2009年度まで毎年、経済産業省や国土交通省の受託事業でモデルツアー実施の経験を蓄積し、2011年2月に障がい者・高齢者の着地型観光相談センターであるカムイ大雪バリアフリースターセンターが開設された。他のバリアフリースターセンターと比較して、カムイ大雪バリアフリースターセンターの設立には際立った特徴がある。特徴1：2011年2月の発足以前からBFTCの機能として既に十分な活動実績があり、その設立は「BFTCを名乗った」ということ。特徴2：異業種交流から発展してきた。特徴3：当初から車いすの障がい当事者の若者がBFTCの中心で活躍した。特徴4：県庁・市役所の組織的関与が薄かった。特徴5：単独のNPOではなく、母体となるNPOの内部組織として運営されている。

1 研究課題と先行研究

1.1 研究課題

本研究は、JSPS 科学研究費研究「高齢化社会におけるバリアフリー観光推進のための

† 本研究は、令和4年度JSPS科学研究費（基盤研究（C）、研究課題：高齢化社会におけるバリアフリー観光推進のための観光地内協力関係の構築に関する研究、課題番号：18K11882、研究代表者：伊藤薫）の助成を受けて実施したものである。本報告の資料入手のために、カムイ大雪バリアフリー研究所の只石幸夫会長、カムイ大雪BFTCの五十嵐真幸センター長、旭川市役所政策調整課、総務課、観光課、スポーツ課、産業振興課、中央図書館、旭川観光コンベンション協会、旭川医科大学など多くの関係者の皆さまには取材や資料入手で大変お世話になった。記して感謝いたします。しかし言うまでもなく、本報告に含まれる誤りは、全て筆者の責に負うものである。なお本文中で敬称は省略させていただいた。また引用した記事などは原則としてそのまま掲載したが、誤記など単純な誤りは修正した箇所がある。

* 岐阜聖徳学園大学経済情報学部。連絡先：kitoh@gifu.shotoku.ac.jp

観光地内協力関係の構築に関する研究」において、今後の本格的な比較研究の準備のために、全国約 20 ヶ所のバリアフリースターセンター（障がい者・高齢者のための着地型観光相談センター。以下、BFTC と略記する。）のうち代表的な BFTC の設立の経緯と、その際における県・市町村、福祉団体、観光団体、他の BFTC との連携の基本的な事実と特徴を記録するものである。本稿では、伊勢志摩 BFTC（伊藤薫 [2019a]、資料 1－1）、秋田 BFTC（伊藤薫 [2020]、資料 1－2）、沖縄 BFTC（伊藤薫 [2021a]、資料 1－3）、石川 BFTC（伊藤薫 [2021b]、資料 1－4）、松江／山陰 BFTC（伊藤薫 [2022]、資料 1－5）に次ぐ第 6 の研究として、北海道旭川市のカムイ大雪 BFTC の設立について記録する。

筆者の科学研究費研究の研究大テーマは「バリアフリー観光推進を通じて日本人観光客を増加させるために、各観光地において BFTC、行政、観光協会、観光業者、福祉団体などがどのように役割分担をし、どのような協力体制を構築したら良いか」である。従来の BFTC の取材において、この研究大テーマを検討するためには、BFTC の設立時点の協力体制と、設立後の継続運営における協力体制に分けて検討することが望ましいと考えるに至っている。そこで、まず設立の経緯を代表的な BFTC について順次記録・整理することとした。

この一連の科学研究費受領研究の期間中において、2020 年度から新型コロナウイルス感染症が流行し、研究の進行に大きな妨げとなった。筆者の研究スタイルにおいては、現地に出向いて取材と資料収集をするのが基本であるが、感染状況が厳しい時には「出張の自粛」によって必要な取材出張ができないことがしばしばあった。そのために、当初予定の研究期間は 2018 年度から 2020 年度であったが延長に延長を重ね、本研究は研究開始 5 年目の 2022 年度の公表となってしまった。

さて本研究の研究課題は、以下のようである。

研究課題：カムイ大雪バリアフリースターセンターの設立の経緯と特徴を記録すること

本研究は、主目的の一つが記録であるので、資料そのままの引用が多く含まれる。参考文献は、各節ごとに資料番号を付して掲載した。

カムイ大雪 BFTC は 2011 年 2 月 1 日に設立された。本研究の研究課題は、その設立の記録であるので、設立後の活動の発展、例えば 2011 年に設立された就労継続支援施設「チーム紅蓮」の設立とその後の発展については若干しか記述しない。本研究の対象期間は、基本的には 2011 年 2 月のカムイ大雪 BFTC の設立までである。

カムイ大雪 BFTC の主要な特徴は、第 13 節で検討するが、概要を略記すると以下の 5 点が挙げられる。第 1 点は、カムイ大雪 BFTC は、2011 年 2 月の発足以前から BFTC の機能として既に十分な活動実績があり、その設立は「BFTC を名乗った」ということ。第 2 点は、異業種交流から発展してきたこと。第 3 点は、設立以前から車いす利用者などの障がい当事者が、運動の中心メンバーであったこと。第 4 点は、設立において県や市の公的な支援を受けておらず、主として「異業種交流」の企業群や大学の協力によって設立さ

表1-1 バリアフリーツアーセンター一覧表(2018年9月現在)

No.	名称	案内エリア
0	日本バリアフリー観光推進機構	全国
1	カムイ大雪バリアフリーツアーセンター	北海道全域
2	秋田バリアフリーツアーセンター	秋田県全域
3	仙合バリアフリーツアーセンター	宮城県 仙台市
4	山形バリアフリー観光ツアーセンター	山形県全域
5	ふくしまバリアフリーツアーセンター	福島市を中心とした福島県全域
6	高齢者・障がい者の旅をサポートする会&東京ユニバーサルツーリズムセンター	日本国中及び海外
7	石川バリアフリーツアーセンター	石川県全域
8	伊豆バリアフリーツアーセンター	伊豆半島全域
9	チクトラベルセンター ハートTOハート(愛知バリアフリーツアーセンター)	日本全国/世界各地
10	伊勢志摩バリアフリーツアーセンター	伊勢市・鳥羽市・志摩市を中心に三重全域
11	しやらく旅倶楽部	日本全国/世界各地
12	トラベルフレンズ・とっとり(山陰バリアフリーツアーセンター/とっとり)	鳥取県
13	松江/山陰バリアフリーツアーセンター	島根県全域(特に松江、出雲)
14	広島バリアフリーツアーセンター	広島県内、山口県東部
15	呉バリアフリーツアーセンター	広島県呉市及び広島市の中心部と宮島
16	四国バリアフリーツアーセンター	四国圏内(4県)
17	福岡バリアフリーツアーセンター	福岡市、北九州市、太宰府市、久留米市、浅倉市、宗像市
18	佐賀嬉野バリアフリーツアーセンター	佐賀県嬉野市・佐賀県西部・長崎県中部・ハウステンボス
19	別府・大分バリアフリーツアーセンター	別府市・大分市
20	かごしまバリアフリーツアーセンター	鹿児島県
21	沖縄バリアフリーツアーセンター	沖縄県

原出所) 日本バリアフリー観光推進機構編『旅バリア』(2017年6月)をもとに、アンケート調査(2018年)や取材(2018年)により筆者作成。

出所) 伊藤薫「バリアフリーツアーセンターの設立について(Ⅰ)ー伊勢志摩バリアフリーツアーセンターー」、*Review of Economics and Information Studies*、Vol.19, No. 3・4, p.14の表1-1。

れたこと。第5点は、NPO 法人の内部組織として設置されていること。以上の多くは、筆者の従来の5論文のBFTCとは設立の性格が大きく異なる。そこでカムイ大雪BFTCは今回取り上げて研究するに相応しい。

さて本研究の意義について述べる。筆者の研究大テーマの背景には、日本人観光客の長期的な減少がある(伊藤薫[2017](資料1-6))。特に日本人宿泊客数は1990年頃をピークに長期的に減少を続けてきた。すなわち観光産業は、この観点からはいわば「衰退産業」といえる。日本人観光客数を増加させるにはどうしたら良いか。その具体的な方法の一つとして、筆者は旅行希望の強い、足腰の弱い高齢者、車いす当事者などに旅行に出掛けてもらうバリアフリー観光の推進があると考えている。その意義は、日本の観光のパイを取り合う観光施策ではなく、日本の観光全体のパイを拡大する施策であることである。

バリアフリーツアーセンターは、全国各地に様々なタイプがあり、様々な活動をしている。表1-1は2018年9月現在で日本バリアフリー観光推進機構に加盟しているBFTCの一覧である。筆者の一連のBFTC設立の研究は、この表1-1に記載されているBFTCを対象に始めたが、その後、日本バリアフリー観光推進機構からカムイ大雪BFTC、沖縄BFTCなどが脱退し、他方で新たに加わったBFTCもある。バリアフリー旅行相談センターの近年の全体像については、観光庁観光産業課編『「バリアフリー旅行サポート体制の強化に係る実証事業」報告書」[2021](資料1-7、pp.11-12)に57か所が紹介されている。

1.2 先行研究

本研究で使用した先行研究や資料を紹介する。

(1) バリアフリー観光推進に関する先行研究

BFTC を中心とするバリアフリー観光推進の先行研究をみてみよう。

筆者はまず、科学研究費受領研究（平成 27 年度から平成 29 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題：21 世紀の高齢化社会における岐阜県高山市の福祉観光都市政策の評価と今後の展望、課題番号：15K01971、研究代表者：伊藤薫）（報告書は伊藤薫 [2019b]（資料 1－8）））において、当時、日本のバリアフリー観光推進のトップランナーの一つであった岐阜県高山市の「福祉観光都市政策」を研究し、その比較対象群として三重県・伊勢市の実態把握に取り組んだ。2010 年代半ばの全国の BFTC の概要紹介とタイプ分類に関しては、中村元・中子富貴子 [2016]（資料 1－9）が優れている。筆者は 2018 年度から新たに科学研究費補助金（当初は平成 30 年度から平成 32 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（研究課題：高齢化社会におけるバリアフリー観光推進のための観光地内協力関係の構築に関する研究、課題番号：18K11882、研究代表者：伊藤薫））を受領し、新しく着地型観光相談センターである BFTC の設立・運営について地域内協力関係の研究を開始した。この成果は、第 1.1 節で述べたとおりである。

（2）カムイ大雪 BFTC 及び旭川観光の先行研究

カムイ大雪 BFTC の設立あるいは運営に関する先行研究は未見である。関連して車いす紅蓮隊に関する先行研究に梅村匡史 [2009]（資料 1－10）があり、旭川の 2006 年度から 2009 年度の早期の活動が分かる。北海道におけるバリアフリー観光の先行研究として、西村泰弘・新谷陽子・内藤恵・秋山哲男 [2006]（資料 1－11）があり、冬の旭川のモニターツアーの様子が、旭山動物園や犬ぞりに乗って「地元密着型」の旅行となった、と報告されている。しかしモニター旅行の企画に障がい当事者が中心となっていた記述はない。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料 1－1）伊藤薫、2019a、「バリアフリーツアーセンターの設立について（Ⅰ）－伊勢志摩バリアフリーツアーセンター－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.19、No. 3・4、pp.13-40.

（資料 1－2）伊藤薫、2020、「バリアフリーツアーセンターの設立について（Ⅱ）－秋田バリアフリーツアーセンター－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.20、pp.61-96.

（資料 1－3）伊藤薫、2021a、「バリアフリーツアーセンターの設立について（Ⅲ）－沖縄バリアフリーツアーセンター－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.21、pp.13-58.

（資料 1－4）伊藤薫、2021b、「バリアフリーツアーセンターの設立について（Ⅳ）－石川バリアフリーツアーセンター－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.21、pp.59-89.

（資料 1－5）伊藤薫、2022、「バリアフリーツアーセンターの設立について（Ⅴ）－松江／山陰バ

リアフリーツアーセンター」、*Review of Economics and Information Studies* (岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要)、Vol.22、pp.17-57.

(資料1-6) 伊藤薫、2017、「日本の国内旅行・観光行動は増加したか減少したかー長期統計データによる分析ー」、『日本観光研究学会第32回全国大会論文集』、pp.433-436.

(資料1-7) 観光庁観光産業課編、2021、『「バリアフリー旅行サポート体制の強化に係る実証事業」報告書』.

(資料1-8) 伊藤薫、2019b、『21世紀の高齢化社会における岐阜県高山市の福祉観光都市政策の評価と今後の展望』(平成27年度～平成29年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号15K01971、基盤研究(C))、254ページ.

(資料1-9) 中村元・中子富貴子、2016、『バリアフリー観光のためのホテル・旅館改修計画と地域受入体制づくりマニュアル』、総合ユニコム.

(資料1-10) 梅村匡史、2009、「ICTを利活用したユニバーサルツーリズムの可能性に関する考察」、『日本観光研究学会第24回全国大会論文集』、pp.249-252.

(資料1-11) 西村泰弘・新谷陽子・内藤恵・秋山哲男、2006、「北海道における冬の観光バリアフリー」、『日本雪工学会誌』、Vol.22、No. 3、pp.256-260.

2 北海道・旭川市の人口・経済と観光の動向など

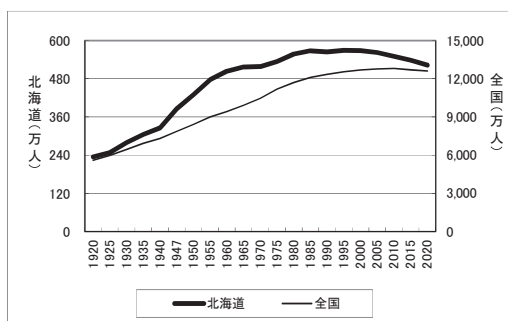
2.1 北海道・旭川市の人口の増加・減少と経済の不振

北海道・旭川市の人口と経済の動向を概観しよう。

北海道の国勢調査人口のうち過去最大は、1995年の5,692,321人であるが、21世紀に入ってから減少が始まり、2020年には5,224,614人に減少した(図2-1)。

北海道第2の都市である旭川市の国勢調査人口(現在市域による人口)は、図2-2に示したように1920年の106,468人から長期的に増加を続け、1985年の363,631人で過去最大となった。しかし21世紀に入り緩やかな人口減少に転じ、2020年は329,306人であった。1920年から2020年の100年間の人口増加倍率は、全国の2.25倍、北海道の2.23倍に対し旭川市は3.09倍と大きい。高度経済成長期の増加が著しかった。

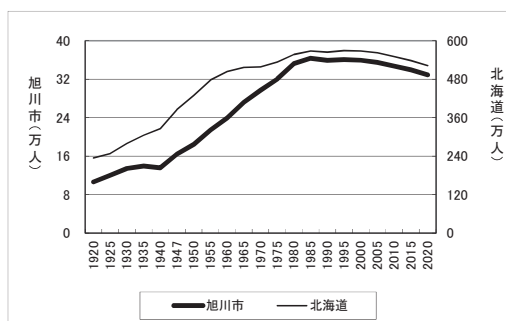
北海道経済を人口1人当たり道民所得の全国水準値(全国=1)で観察すると(図2-3)、1955年度、1957年度から1959年度は、全国以上であり北海道は経済的に見て全国より豊かな地域であったことが分かる。当時は、北海道は炭産地を抱え、大いに潤っていた。しかし高度経済成長期から長期にわたってこの全国水準値は低下を続け、近年では2007年度の0.780(過去最低)に達したが、これをボトムに上昇傾向にあり、2018年度は0.827に回復している。



注) 1920年から2020年の倍率は、全国は2.25倍、北海道は2.23倍である。
北海道の最高人口は、1995年の5,692,321人である。

資料) 国勢調査

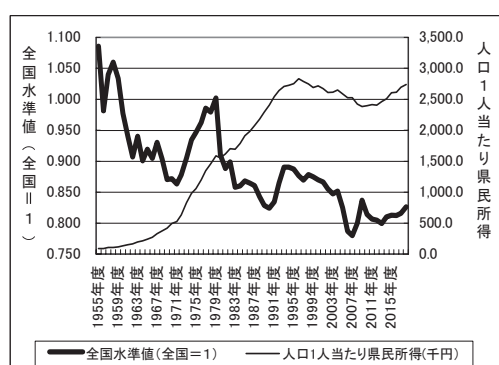
図2-1 人口の推移(全国と北海道、1920年～2020年)



注) 1920年から2020年の倍率は、北海道は2.23倍、旭川市は3.09倍である。
旭川市の最高人口は1985年の363,631人である。

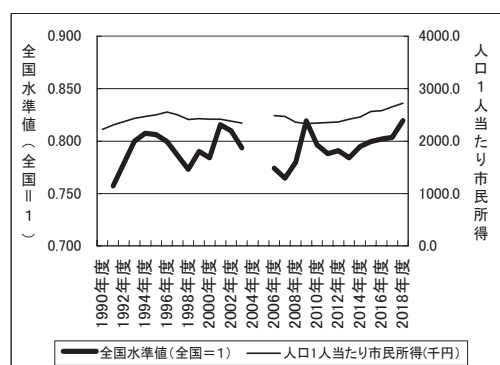
資料) 国勢調査

図2-2 人口の推移(北海道と旭川市、1920年～2020年)



資料) 県民経済計算

図2-3 北海道の人口1人当たり県民所得の
全国水準値(1955年度～2018年度)



資料) 旭川市市民経済計算、県民経済計算

図2-4 旭川市の人口1人当たり市民所得の
全国水準値(1990年度～2018年度)

次いで旭川市の人口1人当たり市民所得の全国水準値(全国=1)を見てみよう(図2-4)。時系列で連続したデータが入手できなかったが、旭川市総務課の努力によって1990年度から2002年度のデータが入手できた。図2-4からは、旭川市の全国水準値は、1990年代から2010年代に総じて緩やかに上昇傾向にあり、2018年度は0.820に達したことがわかる。しかしこの2018年度においては、残念ながら北海道の0.827よりまだ低く、全国平均の1に比べて相当低い水準にある。この全国水準値は長距離人口移動と強い関係があることが知られている。この旭川市の人口1人当たり市民所得の全国水準値の上昇が望まれるが、その実現にはいうまでもなく産業振興が重要である。

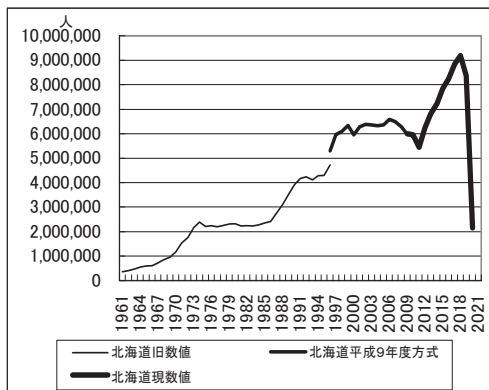
2.2 観光客数の増加

さてそれでは北海道と旭川市の観光客数は、どのような推移を示しているのだろうか。

観光統計において、観光客数の把握には難しい問題がある。例えば、北海道に来道して札幌市と旭川市を訪問した場合に、北海道の入込客数は1人であるが、札幌市と旭川市の入込客数はそれぞれ1人である。また旭川市を訪問して旭山動物園と三浦綾子記念文学館

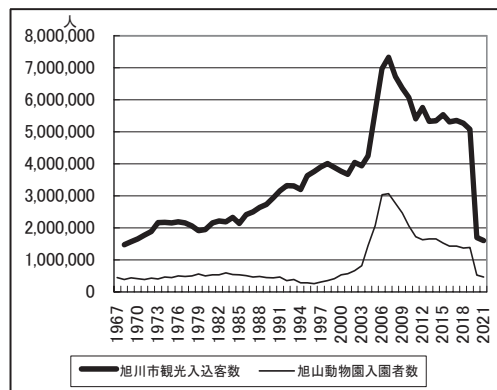
を訪問した場合には、旭川市の入込客数は1人であるが、旭山動物園と三浦綾子記念文学館の入込客数はそれぞれ1人である。そこで、北海道の入込客数の計算は「延べ数」（各市町村の入込客数の合計）なのか、「実数」（北海道への入込客数）なのか、という問題が生ずる。同様に、旭川市については、旭川市の入込客数の計算は「延べ数」（各観光スポットの入込客数の合計）なのか、「実数」（旭川市への入込客数）なのか、という問題が生ずる。

図2-5の北海道の来道観光客数（実数）は、北海道へ入道した観光客数を把握しており、道内の市町村を複数訪問しても1人でカウントしている。図2-6の旭川市の観光入込客数は、市内の観光スポットの入込客数の合計であり、調査対象の観光スポットや観光イベントが増加すると観光入込客数も増加するので、長期的な比較には注意が必要である。



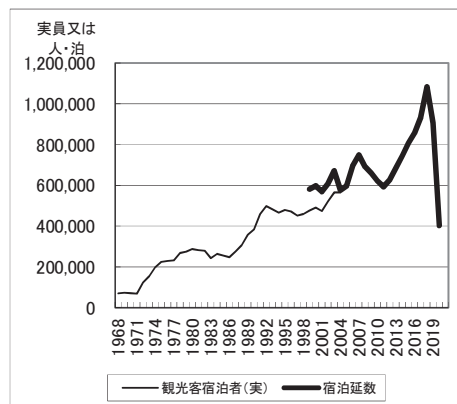
注)単位は、人。年度。来道観光客数(実人員)である。
出所)北海道経済部観光局観光振興課「北海道観光入込客数調査報告書」により筆者作成。

図2-5 北海道の来道観光客数(実人員)の推移
(1961年度から2020年度)



注)単位は、人。旭川市は観光入込客数。年度。
出所)旭川市観光スポーツ交流課「観光入込客数等について」及び旭山動物園「年度別入園者数」により筆者作成。

図2-6 旭川市観光入込客数と旭山動物園入園者数の推移
(1967年度から2021年度)



注)単位は、観光客宿泊者(実)は実員、宿泊延数は人・泊。年度

図2-7 旭川市の宿泊者数の推移
(1968年度から2021年度)

さて、北海道の来道観光客数をみると（図2－5）、北海道の観光客数は長期的に急激に増加してきており、1961年度の35万8千人から2018年度は918万5千人に達した。2020年度は新型コロナウイルス感染症流行のために、215万人に激減した。

旭川市の観光入込客数（延べ数）をみると（図2－6）、北海道同様に1968年度の148万人から着実に増加した。2000年代に入って旭山動物園の人气が急上昇し2007年度に307万人もの入場者があったが、この2007年度に旭川市の観光入込客数（延べ数）も733万4千人と過去最高となった。その後は、2019年度に507万9千人となった後に、2021年度は新型コロナウイルス感染症流行のために、160万千人に激減した。

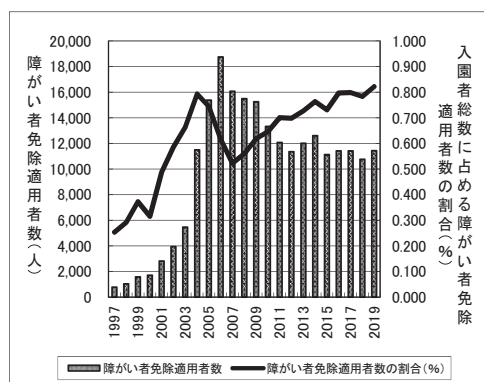
地域経済に大きな影響があるのは観光消費額である。旭川市では観光消費額は公表されていないので、その代替データとして宿泊者数をみてみよう（図2－7）。旭川市では、1968年度の69,579人（実数）から着実に増加し、50年後の2018年度には1,083,100人・泊と大幅な増加を果たしたが、コロナ感染症のために2021年度は379,400人・泊に留まった。

2.3 旭山動物園の障がい者の入園者の推移

今回の調査で旭山動物園のご好意で、障がい者免除適用者の人数と入園者に占める割合のデータ提供を受けた（図2－8）。

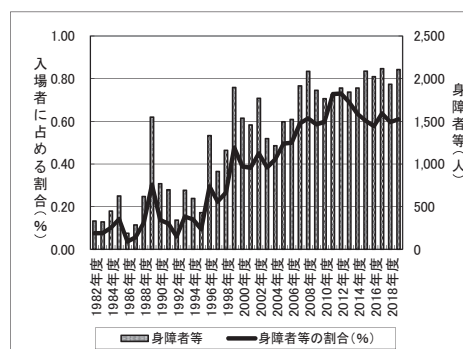
障がい者免除適用者とは、「地方自治体が発行する身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている者で、入園に際し各種手帳の提示を受け、入園料免除を適用した者」であり、必ずしも実数ではない。ここでは免除を受けた同伴者を含んでいない。残念ながら2020年度からデータがなくなったが、長期データの保存が望まれる。

障がい者免除適用者の実数は、2006年度の16,056人が最大であるが、その後は2010年度ころまで減少し、近年は11,000人前後でほぼ横ばいである。注目されるのが入園者に



注)障がい者免除適用者とは、地方自治体が発行する身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている者で、入園に際し各種手帳の提示を受け、入園料免除を適用した者。
免除を受けた同伴者を含まず。2020年度からデータなし。
出所)旭川市旭山動物園の提供資料により、筆者作成。

図2－8 旭山動物園の障がい者免除適用者数の推移
(1997年度～2019年度)



注)原資料では2006年度まで「身障者」、2007年度以降は「身障者等」の数値。
身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳などを提示して、入場料の減免を受けた者の数による。
出所)高山陣屋の提供資料により、筆者作成。

図2－9 高山陣屋の入場者数に占める身障者等の推移
(1982年度～2019年度)

占める割合である。これは2004年度のピークの後には一時低下したものの近年再び上昇傾向にあり、2019年度は0.82%で過去最大であった。このようなデータは大変貴重であり、参考までに岐阜県の高山陣屋の例を図2-9に示す。

2.4 旭川市の総合計画・観光基本方針におけるバリアフリー観光推進の位置づけ

バリアフリー観光推進あるいは観光庁のユニバーサルツーリズムが、現行の「旭川市総合計画」及び「観光基本方針」でどのように位置づけられていたかを確認してみよう。

『第8次旭川市総合計画』（資料2-1）及び『旭川観光基本指針』（資料2-2）の両者を点検したところ、バリアフリー観光推進あるいはユニバーサルツーリズムへの直接の言及は残念ながら見当たらなかった。『第8次旭川市総合計画』の基本計画の基本政策5においては、障がい者スポーツに関し「オリンピック・パラリンピックを見据えた各種大会や事前合宿などの誘致は、競技力の向上や交流人口の増によるまちの活性化につながることから、本市で開催した国際大会の実績を国内外に積極的に発信し、誘致活動を進めるとともに、受入体制を整備していくことが必要です」（p.45）とされている。また『旭川観光基本指針』においては「(2) スポーツと観光の連動」の節の中で「旭川ハーフマラソン」「バーサーロペット・ジャパン」等のスポーツイベントへの参加を含めた各種スポーツ体験のメニュー充実を図るとともに、スポーツ観戦や選手合宿を観光と結び付ける商品造成等の取組を促進します」（p.15）とされている。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料2-1）旭川市、2016、『第8次旭川市総合計画』2016年3月策定。

（資料2-2）旭川市、2019、『旭川観光基本方針』2019年3月策定。

3 カムイ大雪バリアフリー研究所とカムイ大雪バリアフリースターセンターの概要

3.1 カムイ大雪バリアフリー研究所・カムイ大雪バリアフリースターセンター・車いす紅蓮隊・チーム紅蓮の相互関係

第3節からは、カムイ大雪 BFTC の設立の経過の記録であり、本論文の中核の説明となる。まず、カムイ大雪 BFTC を取りまくカムイ大雪バリアフリー研究所（以下、カムイ大雪 BF 研究所と略記する）、車いす紅蓮隊、チーム紅蓮の相互関係の概説から始めたい。なお以下、只石幸夫を只石会長と表記する。

北海道旭川市東旭川町旭正 315 番地 2 にこの 4 団体は事務所を構えている。この 4 団体の中心となっているのは、NPO 法人カムイ大雪 BF 研究所である。NPO としての設立認証年月日は、2011 年 8 月 18 日であるが、創立は 2006 年 6 月 1 日とされている。これは法人化当時から考えると、法人組織になったのは 2011 年であるが、研究所の活動の実体が出来上がったのが 2006 年である、という意味であろう。

これに対し、カムイ大雪 BFTC は、カムイ大雪 BF 研究所の内部組織であり、障がい者・高齢者のための着地型観光相談所の機能を担当している。設立は、2011 年 2 月 1 日である。車いす紅蓮隊の活動から発展して既に BFTC の実体があったものを 2011 年に「バリアフリースターセンターとして正式に名乗った」ということであり、本研究の第 11 節で説明する。

チーム紅蓮は、カムイ大雪 BF 研究所の内部組織であり、障がい者自立就労支援サービスを提供する就労継続支援 A 型 B 型事業所である。設立は、2011 年である。一般企業への就職が難しい障がい当事者の就労促進という重要な機能を果たすために、NPO 法人格を取得しているカムイ大雪 BF 研究所が、その内部組織として就労継続支援施設を運営し、法律上の形式を整えた。

理解が難しいのが、車いす紅蓮隊である。第 6 節で説明するように、2006 年 6 月にトリノパラリンピックの写真展が開催され、そこで会場のお世話を担当した車いす当事者の若者 3 人組に、いつの間にか「車いす紅蓮隊」という名前が付いた。そこで、車いす紅蓮隊は、設立されたというよりは、誕生したという方が正しい事情の説明である。そして車いす 3 人組の活動は徐々に幅を広げ、人数も増えていき、NPO 法人カムイ大雪 BF 研究所の誕生に実っていった。五十嵐隊長によれば、「車いす紅蓮隊は組織名ではなく、活動名である」とのことであったが、その意味は、車いす紅蓮隊には、名簿がない。そこで例えば、旭川夏まつりのユニバーサルみこしを担ぎに集まってきた人々を、小さな子供から只石会長まで全部含めて、そこに集まった人々を総称して「車いす紅蓮隊」と呼んでいる。という訳で、「車いす紅蓮隊」のメンバーは、旭川は勿論、札幌など他地域の人までが含まれる。メンバー数は、大きな行事では多数になり、普段は少数のメンバーの活動となる。

なお 2017 年 5 月 28 日付け北海道新聞の記事によれば只石会長はバリアフリーの問題に

取り組むきっかけを問われ、「今から 20 年ほど前、異業種交流が盛んだったころ、ある会で車いすに乗った福祉関係者に出会い、意気投合して友達になりました。知恵を出し合って誰もが住みやすいまちづくりを構想するようになったのです。」という。

3.2 カムイ大雪バリアフリー研究所

まずカムイ大雪 BF 研究所の概要をその HP (<https://np0.kamui-daisetsu.org/about/>、2022 年 8 月 22 日 閲覧) により紹介する。

「私たちカムイ大雪バリアフリー研究所は SDGs（持続的な開発目標）「3. すべての人に健康と福祉を」、「4. 質の高い教育をみんなに」、「11. 住み続けられるまちづくりを」を目標とターゲットに掲げ、2030 年共生社会の実現に向けた障がいの有無、年齢や性別、国籍に関係なくスポーツや文化活動を共に楽しむ事ができる誰もが暮らしやすい地域づくりに取り組んでいます。

「車いす紅蓮隊」と旭川医科大学をはじめとする地域の大学関係者、病院、介護施設、福祉用具制作、旅行事業者らで構成し、「障がい者自立就労支援サポート」を中心事業に据え、ホテル、料飲食企業や旭川障がい者文化スポーツ振興支援会、市民団体、観光協会、商工会議所等との連携でカムイ大雪バリアフリースターセンター（旅リハセンターカムイ大雪）を設立し、障がい児者から高れい者までの旅づくりを支援する無料相談センターを運営しています。

そのバリアフリー観光の到着地相談を受ける際に必要な施設やサービスの実際を、地域の障がい当事者の視線で現地を調査したり、夏まつりや冬まつり等の地域独自のイベントとアダプテッドスポーツ（障がい者や高れい者、子供たちも参加できるように修正創作された新しいスポーツ）を意識して組合す旭川独自の誰にもやさしいまちづくりを進める企画調査を実施しています。

さらには、障がい当事者がリードする誰にもやさしい障がい者自立就労支援サービスを提供する就労継続支援 A 型 B 型事業所「チーム紅蓮（ぐれん）」を運営し、一緒に働く仲間たちが地域内外で活躍しています。

他にも旭川ウェルビーイング・コンソーシアムのバリアフリー研究ワーキンググループほか地域内外の様々なバリアフリー推進活動に参加しています。」

以上のように研究所を中心に 4 者は一体として非常に幅広い活動をしているが、＜特に力を入れている事＞として以下の 3 点が挙げられている。

「障がい当事者による障がい者が自立・就労できる地域システムの構築

就労継続支援施設 A 型 B 型 「チーム紅蓮」にて活動中

地域社会体験学習から障がい者を指導・教育できる仕組みづくり」

さて、カムイ大雪 BF 研究所の現在の概要を紹介する。

運営主体：特定非営利活動法人 カムイ大雪バリアフリー研究所

法人代表者：会長 只石幸夫

法人現住所：〒078-8368 北海道旭川市東旭町旭正 315 番地 2

電 話：0166 - 38 - 8200

法人設立年月日：2006 年 6 月 1 日

法人設立認証年月日：2011 年 8 月 18 日

法人設立登記年月日：2011 年 8 月 29 日

法人有給役員職員数：7 人

障がい者就労継続支援 A 型・B 型利用者：25 人

うち車いす利用者 10 人、視覚障がい者 2 人、聴覚障がい者 1 人

営業時間：9：00～17：30 土日祝定休

団体 HP：<https://npo.kamui-daisetsu.org/>

カムイ大雪 BF 研究所に設立趣意書はない。そこでその代わりに研究所の「定款」の（目的）を掲げる。

「第 3 条 この法人は、障がい者やその家族、また高れい者やその家族、その他の手助けを必要とする人々が健やかに自由に暮らせる地域社会づくりと社会全体の利益の増進を目的とし、真のバリアフリー社会の実現に寄与することを目的とする。」



出所）カムイ大雪バリアフリー研究所提供

図 3-1 カムイ大雪バリアフリー研究所

3.3 チーム紅蓮

次にチーム紅蓮の概要をその HP (<https://teamguren.kamui-daisetsu.org/>、2022 年 8 月 22 日閲覧) により紹介する。

「チーム紅蓮とは」のページには、以下のように紹介されている。

「北海道旭川市にある指定障害福祉サービス事業所です。イベントやスポーツ活動に積極的にに関わり、地域と一体となった仕事づくり・暮らしやすさを目指しています。ものづくりや、パソコン事業、軽作業を通して、「地域の役に立つ」「仕事する楽しさ」を実感できるよう実践しています。」

「就労継続支援事業 チーム紅蓮について」

チーム紅蓮とサービス利用契約をすることで、仕事に従事することができます。

■就労継続支援 A 型 (定員 10 名) ■就労継続支援 B 型 (定員 20 名)

■業務 (作業内容) について

障がいや能力に合わせて、自分ができる仕事を見つけて実施しています。受注業務、受注生産を主としており、季節や月ごとで仕事変動することもあります。基本的には下記の業務にわかれています。

ものづくり事業／ ICT 事業／ 水・美土里事業／ アダプテッドイベント事業／
軽作業／ ニュースポーツ事業／ バリアフリー観光推進事業／ 修復復元事業／
調査研究事業」

チーム紅蓮は、只石会長が地元行政から「車いすの人の働く場を作ってほしい。やる人がいない」と要望を受け、始めたという。

本研究の主目的は、バリアフリースターセンターの設立について記述することなので、チーム紅蓮が現在のカムイ大雪 BF 研究所の主要な事業であることを認識しつつ、その紹介は以上に止める。

4 旭川市で活発だった異業種交流

4.1 はじめに

第 3.2 節で紹介したように、カムイ大雪 BF 研究所は異業種のメンバーの協力で成り立っている。

さて異業種交流とは何か。『有斐閣経済辞典第 5 版』(2013 年発行)や『現代用語の基礎知識』(2008 年版)には、この用語の解説はない。

そこで『中小企業白書』の中から、異業種交流について言及しているものを紹介しよう。『昭和 56 年版 中小企業白書－技術と知識で拓く中小企業の経営－』では、「異業種間企業交流」を以下のように紹介している (中小企業庁 [1981]、資料 4－1、p.197)。

「最近では従来の業種、あるいは組織の枠を越えて異業種の企業が情報交換を行うなかで、新製品開発のアイデアを入手したり、さらには共同技術開発を実現したりする異業種間企業交流の活動が活発化してきている。」

そして「最近活発化している異業種間交流は、共同技術開発やその前提となる技術情報の入手、技術提携先の探索のための定例的な情報交換会を開く企業交流グループの形成によって特徴づけられる。」とし、「こうした企業グループが全国各地で形成されてきたのはごく最近になってから」としている。

異業種交流活動のその後の展開については、野崎謙二〔2010〕（資料4－2、pp.3-5）が、「中小企業白書にみる異業種交流活動」の項で、「1980年代の考え方」と「1990年代以降の考え方の変化」を整理している。

筆者は、この異業種交流を、経済活動における「競争と協力」の実態のうち「協力」の一形態として重要視している。経済活動においては、「競争」が重要なことは論を俟たないが、一方において「協力」も経済活動の重要な要素と考える。著名なマイケル・ポーターの産業クラスターにおいては「競争しつつ同時に協力している」状態とされているが、「協力」は産業クラスター内部においてばかりでなく、経済活動において各種の企業組合や商店街活動など、幅広く観察される現象である。その「協力」の一形態として、異業種交流があるが、このテーマは非常に大きいので、本研究では旭川市を中心に事例紹介に留まる。

4.2 只石会長の異業種交流の体験

只石会長によれば、北海道、旭川は異業種交流が盛んな地域であった。「旭川は、人、技術がまとまるにはちょうど手ごろ。市場が小さいというマイナス面もあるが、異業種交流には最適の地」（1997年12月24日付け北海道新聞）。北海道の場合は、北海道機械工業会のメンバーがリーダーとなって始まっていた。その例として、全国中小企業融合化促進財団の理事長になった庄村裕・北海道玉造鋼業社長がいた。只石会長は、今でも北海道、旭川はやっているだろう、というが、シスコン・カムイは現在では異業種交流はやっていない。旭川市の異業種交流の歴史をまとめることは本研究の範囲を超えるが、かつての旭川の中心人物の一人が只石会長であったので、只石会長の関係した様々な出来事からその一端を整理してみよう。

只石会長が異業種交流に取り組むきっかけとなったのは、高校を卒業して建設会社に入社し、全国を回っていた1980年代に「公共事業に依存するだけではいつか破綻する」という強い危機感を抱いたことであるという（1997年12月24日付け北海道新聞）。

故郷に戻り交流を呼びかけ、地元の市議会議員選挙の応援で10社くらいの若手のまちづくり仲間が集まったのが最初という。日刊工業新聞が設立をサポートした「北・北海道工業人クラブ」にこのうち何人かが参加した。1988年に日本の異業種交流グループとして、中国遼寧省の集団に招請され、天安門事件の前後に2度訪中したことがあった。

只石会長によれば、「異業種交流のメンバーは誰でも良いわけではなく、人柄はよくてもヒト・モノ・カネ・情報の相互補填が可能なもの同士でしか成就させられない。」「このような人を見定めるには旭川の経済規模は大き過ぎず、小さ過ぎず、適しているような感じを持っている」。

1980年代に全国の零細建設業の若手経営者が20名ほどで勉強会を続けていた。その旗印は「シスコン」。「シスコンには、システムをコンストラクト（構築する）しコントロール（管理する）」という意味が込められている」（1997年10月22日付け北海道新聞）。提唱者のコンサルタントが急死したためにこの構想は自然消滅となった。しかし人とのつながりが財産となった。

4.3 旭川異業種交流プラザの発足（1985年）

1980年代の旭川の異業種交流の記録として、1985年に発足した旭川異業種交流プラザがある（グラフ旭川 [1985]、資料4-3）。

この異業種交流は、財団法人旭川信用金庫産業情報センターが母体になり、製造業を中心に22人が指名され、1985年8月に発足した。当時、道内には8つの異業種交流団体があったという。9月には北海道異業種交流連絡協議会が発足し、入会した。

当初の会の目的は、「内容としては、仕事の異なる人たちが集まって、勉強をして行こうと、とにかくかみしもを脱いでザックバランに自分たちの企業を洗いざらい話をして、異業種から学び、旭川の活性化を計ろうということです」という。

4.4 旭川産業高度化センターのアルコール倶楽部の発足（1992年）

旭川の異業種交流を調べると、しばしば登場するのが「アルコール倶楽部（クラブ）」である。以下の本節の記述は、主に重野健一 [1993]（資料4-4）による。

このアルコール倶楽部は、1992年4月に設立された（株）旭川産業高度化センターの内部に、1992年9月18日にその交流促進事業の一つとして、会員制異業種交流グループとして誕生した。「北の生活文化産業の創造」を進める旭川地域において、頭脳立地構想の中核的推進母体である第3セクター「旭川産業高度化センター」が、国（通商産業省）、北海道、旭川市、民間の出資により株式会社として1992年4月に設立された。「アルコール倶楽部（クラブ）」の会員数は1993年現在で134社を数える。会員の業種構成は、134社中で、建設業28社、製造業50社、電気、ガス2社、運輸、通信2社、卸売業・小売業20社、金融・保険7社、不動産3社、情報サービス6社、専門サービス（デザイン等）11社、その他サービス5社と、第2次産業、第3次産業のほぼ全ての業種を網羅している。その他に、官を中心とする特別会員、時々ニーズに応じて助言を得るための、学を中心とするアドバイザーグループから成っている。

旭川産業高度化センターはARC（アルク）をコミュニケーションネームとしているが、

その意味合いは、「旭川という地域の調査研究、ルネッサンスを实践するセンター、核となる」（下線は重野健一 [1993] による）というものである。

アルコー倶楽部の活動の前提は、以下の3点が挙げられている。

①彼等（地元産業人）の率直なニーズや課題を把握し、実施計画、事業計画に反映させていくこと。②官や学との適切なコーディネーター役を果たすこと。③ ARC というステージと頭脳立地構想というシステムを思う存分に活用して業績を伸ばしてもらうこと。

「アルコー」の名称については、ARC の倶楽部であること、アルコールつきで肩ひじ張らずリラックスして本音で話し合おう、ゆっくりでも自分の足で着実に歩み出そう、という程度の意味でつけたものである、という。只石会長の思い出では、「会議テーブルの横には缶ビールがたくさん入った冷蔵庫が置かれていた」そうである。

設立後の約1年の活動は、会員を6班に分け月例会を開催、全体交流会で講演と立食パーティなどを行っている。

アルコー倶楽部は、日本経済新聞 2006 年 5 月 15 日付け記事「地域活性化、火付け役」などに紹介され、新製品の開発、提案、シンポジウムの開催、まちづくりや地域活性化など様々な分野で活動を行い、地域の異業種交流団体として重要な役割を果たしていたことが分かる。

そしてアルコー倶楽部のメンバーは、2005 年のトリノパラリンピックのアイススレッジホッケー代表選考の旭川合宿で大きな役割を果たすことになる。

なお、旭川産業高度化センターの業務は 2010 年 4 月に一般財団法人旭川生活文化産業振興協会に引き継がれ、さらに 2011 年 4 月に一般財団法人旭川産業創造プラザ（1992 年設立、2010 年一般財団法人へ移行）に引き継がれて現在に至っている。

4.5 異業種交流の成果「木橋」がグッドデザイン賞を獲得（1997 年）

1997 年の通産省グッドデザイン賞にシスコン・カムイの「木橋」（もっきょう）が選定された。異業種交流の成果の一例である。グッドデザイン賞の HP によると、部門は商品デザイン部門、受賞企業はシスコン・カムイ株式会社、デザイナーはシスコン・カムイの企画開発室職員であり、受賞番号は 97N0809 となっている。

1997 年 10 月 22 日付け北海道新聞「只石幸夫さん（44） シスコン・カムイ社長 旭川 間伐材を建築に 社長は「ユーザー本位」によると、「割れやすく腐食しやすかったカラマツ材を特殊な乾燥法で安定させ、さらに鉄骨材で十分な強度をもたせる。北海道林産試験場との連携の結果、地元の材料の製品化までこぎつけられた。これまでの異業種交流の成果が大きかった」。製品の開発には、試験場の他、木材乾燥機メーカー（鉄工所）、木材業者も参加した、とのことであった。

4.6 北海道技術・市場交流プラザ (1998 年)

只石会長によれば 1996 年度と 1997 年度に開催された「北海道技術・市場交流プラザ」が 1998 年 3 月に終了した。只石会長は同会の代表幹事であり、参加者は 20 名であった。

1997 年度のテーマは「医療・農業分野での情報交流の推進」であり、代表幹事の最後の挨拶文には、「＊ 高齢化社会に対応するバリアフリーとは・・・」「＊ 自分自身が暮らす望ましい高齢化社会とは・・・」「＊ 健康で元気な高齢化社会を目指すには・・・」と記されている。

1997 年 10 月には、北海道国際航空 (株) の浜田代表取締役副社長の講演もあった、という。北海道国際航空 (エアドゥー) は、この「北海道技術・市場交流プラザ」と「北海道工業人クラブ」の仲間と声から始まって創設されたといっても過言ではない、と只石会長は語っている。

<参考文献> (本文中の資料の掲載順による)

(資料 4-1) 中小企業庁、1981、『昭和 56 年版 中小企業白書』。

(資料 4-2) 野崎謙二、2010、「異業種交流活動から見た産業クラスター計画—テクノミクス北九州を例として—」、*ECONOMIC RESEARCH CENTER DISCUSSION PAPER*, No. E10-1, ECONOMIC RESEARCH CENTER GRADUATE SCHOOL OF ECONOMICS NAGOYA UNIVERSITY.

(資料 4-3) グラフ旭川 (執筆者名なし)、1985、「旭川異業種交流プラザ発足 他社から経営のノウハウを学び、自社の意識や利益を高め、旭川を活性化させよう」、『グラフ旭川』、No. 83、pp. 8-9.

(資料 4-4) 重野健一、1993、「アルコール倶楽部の発足と活動内容」、『研究開発マネジメント』、Vol. 3, No. 6、pp. 86-90.

5 旭川市で活発な障がい者スポーツ

5.1 はじめに

カムイ大雪 BF 研究所の成立において、もう一つの重要な前史が国際的なあるいは全国的な障がい者スポーツ交流の存在である。特に重要なのが、2005 年 11 月に開催されたトリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表選考のための旭川合宿において、異業種交流企業の市民が支援活動を行ったことである。そしてそれ以前からも、旭川ではスポーツ活動に対して、市民のボランティアレベルの支援活動があった。第 5.2 節では、その一例としてスウェーデンのグスタフ国王を招聘した第 10 回バーサーロペットジャパン (1990 年) について紹介し、更に第 5.3 節でアイススレッジホッケー日本代表選考の旭川合宿を紹介したい。

なお、旭川市の障がい者スポーツは、これだけで大きな研究テーマであり本研究では不

十分である。第5.4節に最近の活動状況を紹介したに留まる。

5.2 バーサーロペットジャパン (1990 年)

バーサーロペットジャパン (Vasaloppet JAPAN) とは、公式ホームページ (<https://www.vasaloppet.jp>、2022 年 8 月 28 日閲覧)によれば、北海道旭川市で行われるクロスカンтриー・スキーマラソンの国際大会である。主催は、バーサーロペット・ジャパン組織委員会であるが、その構成団体の一つに旭川市が入っている。1981 年に第 1 回が「旭川国際バーサー大会」として開催された。現在では、スウェーデン、日本、アメリカ、中国の 4 か国の国際大会となっている。2020 年の第 40 回大会から 2022 年 3 月の第 42 回大会は、コロナ感染症の流行のために中止となった。

1990 年にスウェーデンのカール 16 世グスタフ国王の招聘が実現したが、その前に 1988 年 1 月の旭川市北欧視察団の派遣があり、1989 年に王宮侍従長を招き、これらが 1990 年のグスタフ国王の招聘につながった。

1988 年の旭川市北欧視察団に只石会長が参加した。この視察でスウェーデン王宮侍従長の招聘を行った。1988 年の視察においては、只石会長は北欧の教育と福祉システムを見学した。例えば、フィンランドのタンベレ市では年明けに始まったばかりの、フィンランド初のホスピスを視察した。日本においてホスピスは、1981 年に静岡県聖隷三方原病院に初めて開設されたが、フィンランドより日本の方が先行していたことを知った。

1989 年に王宮侍従長の招聘が実現した。只石会長は、侍従長滞在時にはほとんど帯同し、当時としてはまだ高級品であったビデオカメラ、編集機などを只石会長の仲間内で揃え、侍従長お帰りの前夜のサヨナラパーティで滞在記録をまとめたビデオを放映し、国王へのお土産として持ち帰ってもらった。

1990 年の第 10 回大会に、グスタフ国王の招聘が実現した。只石会長は、国王が旭川滞在中はほとんど SP などと併行して邪魔しないようにサポートをしたという。担当イベントのダンスパーティの責任者として、会場の借り上げから終了までを取り仕切った。

この当時の一連の活動には、旭川のまちづくりの仲間がボランティアとして参加した。このまちづくりの仲間は、旭川の異業種交流の仲間と中核はほぼ同じであった。

5.3 トリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表選考合宿 (2005 年)

トリノパラリンピックは、2006 年 3 月 10 日から 19 日まで、イタリアのトリノで開催された。アイススレッジホッケーにおいては、日本代表は 5 位の好成績を収めた。その 4 年後 2010 年のバンクーバーパラリンピックでは銀メダルに輝いたが、トリノはその布石になった。アイススレッジホッケーとは、「スレッジ」と呼ばれるスケートの刃を二枚付けた専用のそりに乗り、左右の手にスティックを一本ずつ持ってプレーします」(日本パラアイスホッケー協会 HP、2022 年 9 月 4 日閲覧)という特徴がある。スピードが速く、

氷上の格闘技であることは一般のアイスホッケーと変わらない。

旭川市において、トリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表の最終選考合宿が旭川大雪アリーナで 2005 年 11 月 19 日から 23 日に開催された。この選考会を巡り、様々な人々のめぐり逢いがあった。只石会長もその一員（監事）である旭川市のアルコール倶楽部有志が多く参加し、また旭川医科大学の吉田貴彦教授（現会長）も参加して「旭川障害者スポーツ振興支援会」（現在の、旭川障がい者文化スポーツ振興支援会）が 2005 年 10 月 12 日に約 50 人で発足して合宿を応援した。この支援会が合宿開催の原動力となった。またこの合宿の応援に、後の「車いす紅蓮隊」の中核となる若者 3 人組が参加した。しかし只石会長は「彼らは戦力ではない。来たら手伝ってもらおう。何でも屋みたい」と振り返る。当時、五十嵐真幸始め 3 名は、高校を卒業し、様々なイベントに顔を出していた。

さて旭川障害者スポーツ振興支援会の設立の経過は、以下の通りである。北海道新聞の記事を整理して、箇条書きで記す。

- ・「トリノの大会前、異業種の市民が旭川障害者スポーツ振興支援会を設立し、応援体制を組みました。何かきっかけがあったのですか。」

永瀬充 「二年前の今ごろです（筆者注：2004 年）。福祉関係者の意見をものづくりに生かそうという旭川産業高度化センター（旭川市など出資の第三セクター）の会合（筆者注：アルコール倶楽部と思われる）に出席し、中小企業の人と親しくなりました。トリノ出場を決めたとき、その人がお祝いをしてくれた。その場で日本代表の合宿に自費で参加することを説明したら、『じゃあ、応援しようか』と言われたのが始まりです」（2006 年 7 月 30 日付け北海道新聞）

- ・一昨年（筆者注：2004 年）の夏、旭川市内で開かれた異業種交流会（筆者注：アルコール倶楽部と思われる）で、アイススレッジホッケーの地元選手・永瀬充さん（30）が講演したのが、支援会のきっかけ。会社経営者や大学教授、公務員らが、永瀬さんの応援のため昨年十月、約五十人で設立した。（2006 年 5 月 4 日付け北海道新聞、以下同じ）

- ・同年十一月（筆者注：2005 年）のスレッジホッケー日本代表の旭川合宿の際は、会員がホテルの手配や選手送迎などを分担。市民と選手の交流会やスレッジホッケー体験会も開催した。市民に合宿見学を呼びかけ、五日間の合宿に延べ約千八百人が訪れた。

- ・合宿最終日の米国との親善試合には一千人を超す観客が詰めかけ、「全国大会でも観客は多くて五百人なのに」と、日本パラリンピック委員会関係者を驚かす活動ぶりだった。

- ・障害者スポーツは、大会に臨む選手の資金難や、練習場所の確保が悩み。財団法人・日本障害者スポーツ協会（東京）は「異業種の市民団体による支援活動は、全国でも初めて。『旭川方式』として、ぜひ広がってほしい」と注目する。

- ・支援会として、今後は通年の活動が課題だ。四月末まで会長を務めた同会相談役の三平孝さん（前 NTT 旭川支店長）は「旭川にはテニスやラグビーなど夏季の障害者競技の選手もあり、継続した取り組みが重要。活動地域を広げ、旭川を障害者スポーツのメッカに

したい」と話している。

只石会長はアルコール倶楽部の企画担当（幹事）を務めていたので、2004 年ころからアイススレッジホッケー活動の経費負担の一助のために、永瀬選手をアルコール倶楽部の講演会に講師として来てもらい知ってもらうことから始めた、という。

以上は表舞台の様子であるが、舞台裏では世話役たちが大奮闘をしていた。支援会の業務は多岐にわたり、例えば、ホテルの手配、選手送迎、市民との交流会実施、アイススレッジホッケー体験会の実施、見学会の実施、大雪アリーナとの日程調整、食事の手配、協賛金の募集、などなどであったが、只石会長は、企画、折衝、準備、実施と一連のプロセスをプロデュースした。

特に、宿泊やリンク使用については、関係者のまだ知らない不安感を解消させるために折衝が続いた、という。この「関係者のまだ知らない不安感」とは、只石会長によれば「それぞれの施設や事業管理者等にとって、アイススレッジホッケーやパラスポーツは未知の世界であり、リンクが、床が、壁が壊されるのではないか、体の不自由な人に泊ってもらうハード、ソフト共に用意ができていない、どこか何をどこまでしたら良いかも考えたことがない」ということであったという。「どのような時に、何を、どのくらい、どこまで、どうする、とかを知る者がいなくて、地域の産学官それぞれが英知を出しあって組み立てた。障がい者スポーツだけでなく、障がい者への対応が未知の世界だった」という。

当初は旭川医科大学の教授もノウハウがなくて、一緒に勉強会を繰り返して学びながらノウハウを作りだした、という。例えば、下肢麻痺の者が骨折しても、本人自体が気づけないまま時間経過で手遅れになる危険があった、やけどをしても熱いを感じられず、逆に寒いのに低体温症になるまで分からない、などなど怖い思いをたくさんした、勉強をさせてもらった、という。

この合宿支援について只石会長は「合宿で全国から選手が集まると、ホテルなどの市内の施設が利用しやすいか分かります。・・・バリアフリー観光の取り組みです」（北海道新聞 2017 年 5 月 28 日）と述べている。

5.4 最近の障がい者スポーツ

筆者は、バリアフリー観光推進と障がい者スポーツの振興は比較的近い分野と考えている。しかし、障がい者スポーツ研究の範囲は非常に広く本研究の研究テーマとして扱うことが難しい。ここでは、2022 グッドデザイン賞の受賞と近年の旭川で実施されている障がい者スポーツについて紹介したい。

2022 年グッドデザイン賞は、2022 年 10 月に発表された。旭川の「誰にもやさしい地域づくり SST」（幼児期からの障がい児と一緒に楽しむ「誰にもやさしいパラスポーツ体験プログラム」）が受賞した。受賞企業は、特定非営利活動法人カムイ大雪バリアフリー研究所始め、5 団体である。詳細は、<https://www.g-mark.org/award/describe/54518> を参照して

表5-1 旭川市で行われている障がい者スポーツの種類について

種目	チーム名	活動場所(施設名)	活動の頻度
ウィルチエラグビー	神威(カムイ)	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	毎週水
レクレーションポッチャ	RBC000	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	第1、3土
車いすカーリング	旭川キュー斗	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	冬季11月～3月・土日
車いすフェンシング	車いすフェンシングクラブ	おびつた(旭川市障害者福祉センター)、旭川第一小学校	週1回
アダプテッドバスケットボール	バスケット555	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	月1回程度
車椅子バスケットボール	旭川リバー	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	毎週火・金
車いすテニス	ACT(アクト)	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	毎週木
ラジコン Miniレーサー	RC222	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	年4回程度(不定期)
室内車いす野球	旭川ゴールデンフォックス	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	月1、2回土日
フットサル	旭川フレンドハウス	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	集計不可
よさこい	チームびあどらこん	おびつた(旭川市障害者福祉センター)	集計不可
陸上競技・スキー	パラレルクラブ	富沢クロカンコース	集計不可
陸上競技・スキー	旭川ラビッドクラブ	富沢クロカンコース	毎週日曜(夏休みは屋外)
ユニファイド ランニング・クロスカントリースキー	999AC旭川	サンタプレゼントパーク(夏、忠和公園/冬、富沢XCコース)	冬季 週1回
スキー	旭川シュプールクラブ	サンタプレゼントパーク	冬季 不定期 15回(R2)

注1) 2021年秋頃から2022年の旭川市内の主な障がい者スポーツ団体の活動状況。

注2) 活動場所は代表的な活動場所を記載した。他にも多数の施設で活動実績あり。

●花咲スポーツ公園(陸上競技場・テニスコート等) ●道北アークス大雪アリーナ ●忠和公園(体育館) ●勤労者体育センター ●リアル夢りんご体育館 ●ASOBI-BA ●大成市民センター体育館

●カムイスキーリンクス ●東都スケートリンク ●中小企業大学校旭川校 ●公民館 ●サイクリングロード 他

注3) 年間活動日数や参加人数は、集計不可能(1回毎の活動人数は記録が無いため)。

(出所) 旭川市スポーツ課作成資料と旭川バラスポーツ協議会作成資料から、筆者作成。

いただきたい。

近年、旭川で行われている障がい者スポーツは表5-1のようである。コロナ感染症の流行の影響で不確かな面があるが貴重な記録と思われる。

6 車いす紅蓮隊の誕生

6.1 車いす紅蓮隊とは何か

旭川市のカムイ大雪 BFTC の設立に当たって、車いす紅蓮隊の果たした役割は大きい。カムイ大雪 BFTC は 2011 年 2 月 1 日に設立されたが、第 7 節から第 9 節で述べるように 2006 年からのカムイ大雪 BF 研究所、車いす紅蓮隊の活発な活動によって、既にバリアフリーツアースターの実体は備わっており、2011 年 2 月の設立は BFTC を「名乗った」のが実際であった。

そこで、第 6 節では、車いす紅蓮隊の誕生を説明し、第 7 節から第 9 節では経済産業省や国土交通省の受託事業を説明する。

なお、車いす紅蓮隊は五十嵐真幸隊長を中心とする実在の組織であるが、しかし団体名ではなく活動名である。すなわち、車いす紅蓮隊の規約、名簿、設立趣意書はなく、設立年月日も定かではない。「車いす紅蓮隊」とは、例えばユニバーサル神輿を担ぎに参集した幼稚園児や小学生から若者たち、只石会長などの高齢者など全ての人々を総称して「車いす紅蓮隊」と呼んでいる。札幌の住人もメンバーになるのである。

6.2 若者 3 人組による車いす紅蓮隊の誕生

車いす紅蓮隊の誕生は、2006 年 6 月 18 日から 28 日(一説によると 4 月から 5 月にかけて 1～2 週間程度)に、旭川市の平和通買物公園の旭川フードテラス(旭川市 5 条)で開催されたトリノパラリンピック写真展においてであった。若者 3 人組とは、五十嵐真幸、川村徹、中村史志(さとし)の 3 人である。五十嵐、川村は車いす当事者であり、旭川龍

谷高校を卒業して2年目であり、この時は職がなかった。中村は、五十嵐の中学校の同級生であり、この当時、いつも3人で一緒に行動をしていた、という。

前年の2005年には、五十嵐は高校卒業後に北海道上川支庁の行政実務研修生であり、川村は旭川市の研修生であった。この3人組は障がい者のスポーツ振興イベントなどで、しばしば観客として最前列に座っていた。只石会長は、仕事はどうしているのだろうと思い、声をかけてみた。五十嵐が「卒業後に就職先がなかった。企業の面接を受けても、うちには階段があるし、車いす用のトイレもないから、と断られてしまった」というと、只石会長は「だったら手伝ってみないか」と話をした。

さて、平和通買物公園フードテラス1階ロビーでトリノパラリンピック写真展（正式名称は不明、主催は旭川障がい者スポーツ支援会と思われるが明確ではない）があり、数十枚の写真が展示され、ここで車いす紅蓮隊が誕生した。写真展開催前の異業種交流の集まりに、五十嵐はアイススレッジホッケーの永瀬充（2010年バンクーバーパラリンピック銀メダリスト、旭川在住）から誘いを受けて参加し、そこで只石会長たちと出会って、無職ということで写真展の手伝いをする事となった。写真展には、毎日詰めている人が必要である。受付、案内、世話係を担当した。良く言えば管理担当スタッフである。

この写真展には、来場者がほとんど（全く）来なかった。只石会長によれば「3人は会場の整理係。しかし陰に隠れて出てこない。そこで「チラシ配って来い。駅まで行ってこい、お店に入ってPRして来い」と指示」。会場のフードテラスは、旭川駅北数百メートルのところにあった。車いすで毎日1往復。仲間の誰かが（筆者注：五十嵐は只石会長が）「ウロウロするのは「愚連隊」と言った。車いすのチンピラ連中。「人前で動いて来い」「恥ずかしがっている暇はない」。只石会長の思いは、「愚連隊のように車いすで自由に振舞って来い！！」「恥ずかしがらず、車いすに乗って愚連隊みたいに人前でうろついて来い」であった。

五十嵐によると、商店街の人の反応は、「車いすがいる」「うちの店にどう入った？」と店主がびっくりした。「車いすってすごいね」「乗ってみたい」という反応もあった（五十嵐真幸・松波正晃・真鳥実佐子 [2021]、資料6-1、シート3）。当時、旭川の街中で車いすを見かけることはなかった、という。

さて五十嵐の回想では「気が付くと、車椅子愚連隊と呼ばれていた。そもそも自分たちのことだと認識していなかった」という。そこで、車椅子愚連隊はこの時点で、設立したのではなく、誕生したと表現するのが相応しい。そして車椅子愚連隊では新聞記事になる時には勘違いされそうなので、1、2か月で車椅子紅蓮隊となり、その後は車いす紅蓮隊と名乗って現在に至っている。

車いす紅蓮隊の活動が始まった。まずタウンウォッチングが2006年6月に始まり、ついで2006年7月から2007年2月までの経済産業省委託事業「雪の中でもてなし隊・大雪」（コンソーシアム）の活動（第7節参照）が始まった。

6.3 タウンウォッチングの開始

車いす紅蓮隊の初期からの活動の一つが、旭川市でのタウンウォッチングである。車いす紅蓮隊のタウンウォッチングの重要な特徴は、車いす当事者によるバリア調査（バリアフリー調査）である。障がい当事者と健常者が一緒に、健常者だけでは目の届かないところも、当初は車いす当事者の視点で、近年では視覚障害者なども加わって調査を続けてきた。商店街の理事長や商工会議所の職員も参加した。

タウンウォッチングについてまとめた報告書はないので、新聞記事と車いす紅蓮隊ブログ（<https://kurumaisugurentai.net>、2006年10月開始、2022年9月8日閲覧）により、2006年の活動をまとめてみよう。

記録1：記録の残る最初の活動は、2006年6月26日付け北海道新聞の記事「段差や道路の幅は？ 障害者スポーツ選手が調査 旭川」である。「まちのバリアフリー情報を反映した地図を作ろうと、二十五日、旭川市中心部の買物公園で「車いすタウンウォッチング」が行われ、市内の障害者スポーツ競技者やその支援者など約五十人が、店の利用のしやすさなどを調べた」。主催は、旭川障害者スポーツ振興支援会。車いす紅蓮隊からは、川村徹（市内バスケットボールチームに所属）が参加。

記録2：車いす紅蓮隊ブログは、2006年10月分からアーカイブがアップされており、日々の活動が記録されている。タウンウォッチングは、10月から記録がある。

まず、①10月10日に2条ビル名店街1Fの「ラーメン青葉」、他の場所の「ら～めんすがわら」、「ら～めんや天金4条店」、ふらり～と内にある「ら～めん蜂屋」、②11月15日に「グランドホテル」、③11月16日に「旭川地場産業振興センター（道の駅）」、④11



出所）五十嵐真幸・松波正晃・真鳥実佐子、2021、「障がいのある人の生活を支える環境づくりー誰にもやさしいまちづくりを目指した、障がい当事者の活動ー」、PDF ファイル、2021年11月16日受領、シート1

図6-1 車いす紅蓮隊

月 17 日にデパートの「丸井今井」、⑤ 11 月 24 日に「イオン旭川西店」、⑥ 11 月 27 日に「松尾ジンギスカン」、「しゃぶしゃぶべんけい」、買物公園周辺の「身障者用トイレ探し」、⑦ 11 月 28 日に地ビール館の「ピーコック」、ホテル内の「身障者用トイレ探し」、⑧ 11 月 29 日に「大雪地ビール館」、ラーメンの「ピーコック」、南 6 条の「大雪乃蔵」(身障者用トイレあり)、ET ビル地下の「五十番」、と精力的に調査を実施している。

では何を調べていたのか。ブログの 10 月 10 日のラーメン屋 3 店の調査内容は、以下のようなものであった。「目的はバリアフリーマップの作製」とお店の人に説明した。

- お店に入るルートは 3 つあり、入りやすいのはこのルート。
- お店の中は、テーブル席と座敷席。車いすでも移動が可能。
- トイレはお店の向かえ側にあるが、階段が 2 ～ 3 段あって利用不可能。近くの身障者用トイレは、ちょっと距離があるが、ホテルとフードテラスにある。
- 駐車場の台数がしっかりある。
- トイレは車いすでは入れないかもしれないが、乗り移りできる人だと入れる。
- このお店に入ると店員さんがすぐに椅子をずらしてくれる。
- この建物の近くにはマンホールが道路に沢山ある。凹凸が激しいところもあるので注意（同行の健常者が車いすに乗って転んでしまった）。

<参考文献>

(資料 6 - 1) 五十嵐真幸・松波正晃・真鳥実佐子、2021、「障がいのある人の生活を支える環境づくりー誰にもやさしいまちづくりを目指した、障がい当事者の活動ー」、PDF ファイル、2021 年 11 月 16 日受領、28 ページ。（この資料は、旭川医科大学の講義科目「健康弱者のための医学」で活用された。）

7 平成 18 年度経済産業省のサービス産業創出支援事業の実施 (2006 年度)

2006 年度から 2009 年度に法人化前のカムイ大雪 BF 研究所や車いす紅蓮隊は、経済産業省、国土交通省の委託事業を受託し、国土交通省の調査に参加して、モデルツアーの製造と主催者としてのツアー実施の経験を積み、モニターとして招かれる経験も積み、BFTC の運営ノウハウを身につけた。これらの委託事業・調査は全国各地の観光地のいくつかが同じように受託しているので、全国的な記録を兼ねて第 7 節から第 9 節に記述する。

7.1 平成 18 年度経済産業省のサービス産業創出支援事業

経済産業省では、2004 年度から「サービス産業創出支援事業」を実施してきた。2004 年度の対象事業は「健康サービス産業モデル事業」であったが、2005 年度から「観光・集客交流サービス産業モデル事業」が追加され、2006 年度には更に「育児支援関連サービス産業モデル事業」が加わった（近畿経済産業局 [2006] (資料 7-1)、特定非営利活動法人健康サービス産業振興機構 [2007] (資料 7-2)、以下、本節で資料 7-2 を『2006 年度報告書』と呼ぶ)。旭川市のコンソーシアム「雪の中でもてなし隊・大雪 (だいせつ)」は、2006 年度の「観光・集客交流サービス産業モデル事業」に応募して採択された。

この事業の趣旨は (『2006 年度報告書』、p. 1)、「我が国におけるサービス産業は、高い潜在的ニーズが展望されているにもかかわらず、実際には十分な市場の創出につながっていない分野が存在し、・・・供給側が新たな取組みを行うことによって、真のニーズが顕在化し、市場が創出され、新産業としての発展につながるものと考えられる。また地域における新サービス産業の出現によって、雇用を拡大され、地域経済の好循環の形成につながることも期待される」。経済産業省では、こうした戦略的な産業分野における、地域や事業者間での先導的な取組を、国の委託事業により初期段階で支援し、新産業としての発展につなげることとした。

2006 年度の「観光・集客交流サービス産業モデル事業」においては、「コンソーシアム基盤整備事業」「コンソーシアム機能強化事業」と「事業化基本計画策定事業」が実施され 2006 年 4 月に公募された。旭川は前者に応募し、審査を経て 6 月に選定されている。『平成 19 年版観光白書』(資料 7-3、p.55) によれば、応募 125 件中「コンソーシアム基盤整備事業」「コンソーシアム機能強化事業」は 18 件が、「事業化基本計画策定事業」は 25 件が採択された。

対象事業者は、複数の事業主体が連携・協働するために組織された「コンソーシアム」形式によることとされていた。旭川の場合には、長年の異業種交流の活動実績があり、異業種のメンバーを揃えるのは容易であったと推察される。

7.2 モデル事業「雪の中でもてなし隊・大雪（だいせつ）」の概要

以下、本節の基礎資料は、主に『2006 年度報告書』である。

(1) モデル事業の概要

モデル事業「雪の中でもてなし隊・大雪（だいせつ）」の概要は『2006 年度報告書』などによると以下のとおりである。

コンソーシアム名：雪の中でもてなし隊・大雪（だいせつ）

代表団体：(株) 旭川産業高度化センター

コンソーシアム構成企業（7社）：旭川産業高度化センター（第三セクター）、シスコン・カムイ（建設）、アイリンク（ホームページ制作）、COM 泉屋（福祉用具）、くにもと病院、旅工房、近畿日本ツーリスト

実施地域：北海道上川中部地区のうち、旭川市、東神楽町、東川町、鷹栖町、上川町、美瑛町、上富良野町

事業期間：2006 年 7 月から 2007 年 2 月

中間報告会：2006 年 12 月 11 日、経済産業省本館

成果発表会：2007 年 3 月 22 日から 23 日、東京ドームプリズムホール（車いす紅蓮隊の五十嵐と中村が出席）

事業費：約 7,000 万円（全額を経済産業省が負担）

(2) 事業の目的

「雪の中でもてなし隊・大雪（だいせつ）」の事業目的は、以下のようである。（『2006 年度報告書』、p.39）

「本事業は、障がいのある人が安心して旅行を楽しむことができるユニバーサルな体験交流滞在型観光の旅行商品を提供する集客サービスモデルを確立することを目的としている。このため障がいのある人の目線に立った商品の開発やサービスを提供するとともに、障がい当事者や医科学専門家等のアドバイスに基づくサポート体制の確立を図る。また、各種冬季スポーツや犬ぞり体験などのアクティビティ等を組み合わせ、体験・滞在型機能の強化を図る仕組みづくりに加え、飲食・ショッピングや街歩き等の関連する観光活動に対しても安全・安心に楽しめるよう、ハード・ソフトの両面から受け入れ体制を整えていく。」

以上の取り組みの中で、障がい当事者目線の実現はなかなか難しい課題である。しかし旭川のもてなし隊においては、2006 年に誕生した車いす紅蓮隊の若者 3 人組がもてなし隊の主要な事務局メンバーとして参加し、またトリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表の永瀬充がもてなし隊の事業に参画しているので、「障がいのある人の目線に立った商品の開発やサービスを提供」において十分な取組が期待できた。しかし『2006 年度報告書』においては、車いす紅蓮隊や永瀬充の名前は、全く登場しない。

（３）モデル事業の実施項目

モデル事業の実施項目は、以下のようである。（『2006 年度報告書』、p.48）

「①魅力ある体験交流型旅行商品パッケージの開発

- ・トライアルツアーの実施
- ・体制を支える人材、環境の整備

②情報提供システムとプロモーション体制の確立

- ・ユーザー参加型によるポータルサイト開発
- ・首都圏集客窓口と受入れ調整窓口機能の整備
- ・開発パック商品のデータベースの基本設計

③市場性把握、事業モデルの構築」

（４）実施事業の特徴

実施事業の特徴は、以下のとおりである。（『2006 年度報告書』、p.53）

「【ターゲット】 障害者（首都圏中心）

【提供商品・サービス】 冬季スポーツを中心とするユニバーサルな体験交流滞在型観光の旅行商品

【流通チャネル】 首都圏エージェント連携、障害者関連団体チャネル連携

【プロモーション】 参加型 WEB サイト、専門メディア

【地域体制】 障害当事者参加によるプロデュース体制構築、専門分野連携による受入体制構築

【人材】 インストラクター、アドバイザー養成

【収益モデル】 B to B（エージェント） 手数料」

（５）実施事業の成果と課題

①モデル事業の成果

モデル事業の成果は、以下のとおりである。（『2006 年度報告書』、p.58）

「障害当事者を中心とする大手旅行代理店・地元各種サービス事業者・医科学専門家等の協働による商品開発やサービス提供体制が整備された。その結果、顧客満足度の高い旅行パッケージ商品のモデルが確立された。

○ユニバーサルな旅行商品が試行できた。

※参加者の高い満足度

○地元の受け入れ体制が整備された。

※アドバイザーなど

○顧客への情報発信の体制が整備された。

※ポータルサイトの運用開始 ※ユニバーサルに関する情報の基準作成

○首都圏・地元受入の窓口機能が整備できた。

○市場性が確認でき、事業モデルを立案した。」

なお『2006 年度報告書』(p.67)には、「滞在価値を高める地域人材の確保」の項で、「「雪の中でもてなし隊・大雪(だいせつ)」では、受け地の障害者自らが旅行商品企画への参加を行いながら、プログラム体験の指導や滞在中の各種サポートなどが行えるよう人材育成を行った。」と記録されているが、「受け地の障害者」とは、車いす紅連隊や永瀬充などのメンバーを指すと思われる。

②事業推進上の課題

事業推進上の課題は、以下のとおりである。(『2006 年度報告書』、p.58)

- 競争力を持つ着地パッケージ商品の開発 ○営業エリアと顧客層の範囲設定
- 事業主体と連携する地元事業者の選定 ○事業開始・運用資金の確保
- 地域事業者連携ネットワークの構築 ○情報収集・提供機能の強化
- 障害当事者が主体となるプロデュース体制の整備

『2006 年度報告書』においては、モニターの苦情・感謝の言葉は記録されていない。旭川で初めてのモデル事業(モニターツアー)においては、多数の苦情があり、同時に多数の感謝の声が寄せられたと推測されるが、残念ながらその記録は残っていない。第8節の2007 年度調査の記録を参考にしていきたい。

7.3 コンソーシアム「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の特徴

コンソーシアム「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の特徴は、大きく2点あると考える。第1点は、旭川の異業種交流の経験の蓄積が生かされていることであり、第2点は、障がい当事者がこのコンソーシアムの中心になって活躍したことである。

まず、第1点の異業種交流の蓄積については、以下の点が挙げられる。この経済産業省の「サービス産業創出支援事業」の募集期間は、2006 年4月5日から4月19日までとごく短期間であった。トリノパラリンピックが2006 年3月10日から19日まで開催され、その余韻が未だ冷めやらぬ時期に、只石会長や吉田教授などの関係者が大急ぎで応募書類を作成した。その「障がいのある人が安心して旅行を楽しむことができるユニバーサルな体験交流滞在型観光の旅行商品を提供する集客サービスモデル」の企画設計には、前年11月のトリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表選考合宿を異業種企業からなる旭川障がい者スポーツ振興支援会で誘致した経験が大いに役立った。コンソーシアムの構成企業は異業種の7社であり、代表企業はアルコー倶楽部を運営していた旭川産業高度化センターであった。以上のように、旭川市で長年培われてきた異業種交流の取り組みが、このコンソーシアムにも大いに役立った。なお旭川医科大学の吉田教授は、只石会長と一緒に、この事業申請案作成から、申請事務、実施まで、全般に携わった。2005年の合宿始め、2009 年度までの他の委託事業も同様である。筆者は、医師が継続的にバリアフリー観光推進に携わった例を初めて知った。

第2の特徴は、障がい当事者がコンソーシアムの中心で活躍したことである。車いす紅蓮隊の若者3人組は、コンソーシアム当時に20歳であったが、その代表団体である(株)旭川産業高度化センターにその期間に雇用され、職員として事業に取り組んだ。また旭川在住でトリノパラリンピックアイススレッジホッケー日本代表ゴールキーパーであった永瀬もこの事業に参画している。

全国のBFTCの活動においては、障がい当事者は観光関連施設のバリア調査に専門員として参画し、情報発信の一翼を担うのが一般的である。旭川でも、これはタウンウォッチングの形で車いす紅蓮隊などが実施している。しかし旭川の重要な特徴の一つは、車いす紅蓮隊や永瀬などの障がい当事者が、バリアフリー観光推進事業の中心で活躍したことにある。

7.4 コンソーシアム「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の活動

2006年度のコンソーシアム「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の活動を細かく見てみよう。実に様々な活動を展開したことが分かる。基礎資料は、車いす紅蓮隊ブログ(2006年10月開始)と北海道新聞の記事である。車いす紅蓮隊のメンバーは、この事業に参画することで、「社会人の仕事の仕方を教えてもらった」と述懐している。なお試験ツアーの製造、実施、モニターの声などの詳細な記録は、残念ながら未見である。

- ・10月10日：タウンウォッチングを「ラーメン青葉」「らーめんすがわら」「らーめんや天金4条店」「らーめん蜂屋」で実施。(車いす紅蓮隊ブログ2006年10月10日、以下、タウンウォッチングは省略、第6.3節を参照)

- ・10月25日：「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」のメンバー13人が25日にバリアフリー情報を反映した地図を作るために、市内の観光施設を視察した。大雪のメンバーで、道内唯一の車いすラグビーチームの選手でもある三田地政則さん(31)は「観光施設は、車いす利用者にとって入りづらいイメージがあるが、実際に来てみると店員さんが補助してくれて利用できることも多い」と感想を話していた。(北海道新聞2006年10月26日)

- ・12月4日：「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」が、4日に市内の観光関連業者らを対象にした「サービス事業者研修会」を実施。市内のバリアフリー情報を掲載した地図も作成中。(北海道新聞2006年12月5日)

- ・12月17日：「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の主催で17日に、トリノ冬季パラリンピックのアルペンスキー金メダリスト、大日向(おおひなた)邦子さんが講演。障害者とスポーツのかかわりについて語る。(北海道新聞2006年12月12日)

- ・1月20日：「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」の主催で20日に、「2007 障害者アスリートトークセッション in あさひかわ」を開催。トリノパラリンピックのアイススレッジホッケー日本代表の永瀬充さん(旭川)ら、障害者スポーツに携わる6人がパネ

リストになり、障害者に優しい街づくりについて考える。(北海道新聞 2007 年 1 月 19 日)
・ 1 月 26 日:「雪の中でもてなしたい・大雪(だいせつ)」は、初の試験ツアーを 26 日に実施し、東京の車いすバスケットボールチームの選手ら 11 人が旭川入りした。28 日まで、地元チームとの交流や市内観光を楽しむ。試験ツアーは、2 月にも 2 回予定している。(北海道新聞 2007 年 1 月 27 日)

<参考文献> (本文中の資料の掲載順による)

(資料 7-1) 近畿経済産業局、2006、『パワフル関西』、No.441. pp.18-19.

(資料 7-2) 特定非営利活動法人健康サービス産業振興機構、2007、『サービス産業創出支援事業調査研究報告書』。(国立国会図書館に蔵書あり)

(資料 7-3) 国土交通省、2007、『平成 19 年版観光白書』。

8 国土交通省の平成 19 年度国土施策創発調査への参加 (2007 年度)

8.1 国土交通省の平成 19 年度国土施策創発調査の概要

平成 19 年度には、国土交通省実施の「国土施策創発調査」の一環である「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査」(国土交通省国土計画局 [2007]、資料 8-1) に参画した。参画といっても予算要求を行い、事業を企画・実施したのは国土交通省・厚生労働省・農林水産省であり、旭川は決定された枠組みの中で実施者としての参加であった。2006 年度はコンソーシアムの一員として主催者サイドの経験を積んだが、2007 年度は主催者サイドに加えて、モニターとして招かれるゲストの立場の経験も積んだ。

この調査の報告書などには、国土省の作成資料として国土交通省国土計画局 [2007] (「平成 19 年度国土施策創発調査費の配分について」、資料 8-1)、国土交通省総合政策局・北海道運輸局など [2008] (『平成 19 年度国土施策創発調査 地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査報告書』、資料 8-2) があり、近畿運輸局の作成資料として近畿運輸局 [2008] (『(平成 19 年度国土施策創発調査) 地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査 (障壁部会)』、資料 8-3)、北海道運輸局の作成資料として北海道運輸局 [2008] (『平成 19 年度国土施策創発調査 「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査」 調査報告書』、資料 8-4) がある。このうち北海道運輸局 [2008] が当時の旭川の事情に最も詳しく、以下、『2008 年度報告書』と略記する。

まず平成 19 年度国土施策創発調査においては、13 のプロジェクトが実施された (国土

交通省国土計画局 [2007]、資料 8-1)。このうち、「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査」は、実施省庁が国土交通省・厚生労働省・農林水産省であり、予算配分額は 69 百万円であった。実施の中心は、近畿運輸局が担当した。

この調査の趣旨は、以下のものである（国土交通省国土計画局 [2007]、資料 8-1）。
「・・・旅行需要が低迷する条件下では、せっかくの魅力的な観光地づくりも地域間の観光客の取り合いとなりかねないことから、国内の旅行需要全体を喚起していく必要がある。

このため、普段旅行がしたくてもしにくい人々が旅行しやすい環境の整備等により、潜在的な国内旅行需要を喚起・顕在化し、地域の活性化を図るものである。」

この問題意識は、筆者の問題意識と同一である（第 1.1 節参照）。

次に、事業概要は 4 点挙げられているが、そのうちの第 2 が該当する。

「(2) 障壁等により潜在化している旅行需要顕在化のための新たな観光サービスシステム・ネットワーク化の検討」

このテーマに応じて、検討委員会の中に 3 部会が設けられ、旭川の活動はそのうちの障壁部会が該当する。障壁部会の活動報告としては、この部会の中心となった近畿運輸局 [2008]（資料 8-3）が詳しい。障壁部会の調査内容は、「(1) 障がい者・高齢者の旅行ニーズ調査、(2) 障がい者・高齢者等が地域資源を楽しむことができる参加体験プログラムの評価取りまとめ、(3) 障がい者高齢者等が相互訪問できる環境の創造」の 3 点であった。この障壁部会の調査を実施するために、神戸 WG（WING KOBE 他）、旭川 WG（車椅子紅蓮隊他）、沖縄 WG（沖縄バリアフリーツアーセンター他）の 3 地域のワーキンググループ（WG）が設置された。旭川 WG の座長は、吉田貴彦旭川医科大学教授が務めた。

8.2 旭川 WG の活動（その 1：2008 年 1 月の旭川モニターツアーの実施）

旭川 WG では、中央の組織とは別に、旭川 WG 検討評価委員会を設置して、3 回にわたり会議を実施した。委員長は吉田教授であり、副委員長、委員、事務局、オブザーバーを含め、約 30 名の陣容であった。シスコン・カムイ株式会社は、事務局のメンバーであった。障がい当事者として、車いす紅蓮隊は、本調査の中心的な役割を担った（『2007 年度報告書』p.51）。車いす紅蓮隊は 2006 年の誕生から 1 年で県外にも認知されたことが分かる。

『2007 年度報告書』によれば、旭川の取り組みの特徴は、①障がい当事者（車いす紅蓮隊）によるプロデュース、②医科学専門家のアドバイスの 2 点があることである（『2007 年度報告書』p.1）。この他の特徴は、2006 年度のコンソーシアムの経験を「前年度既存調査」と呼んで、その経験を継承していることである。また神戸、沖縄といった当時の先進地域と交流し、そのノウハウを学んだ。

主な活動を以下に紹介する。旭川 WG は、大変幅広い活動をしていることが分かる。

(1) 障がいのある人等が地域資源を楽しめる体験交流プログラムの開発 (『2007 年度報告書』 pp.9-21)

前年度既存調査の成果を活用して、相談受付、手配、迎え・送り、移動、食事、公共スペース・トイレ、訪問先 (文化的施設含む)、スポーツ系アクティビティ、宿泊先、サポート、ガイド、その他サービスと、幅広く、「望ましいサービス水準」を設定した。一例として表 8-1 に「公共スペース・トイレ」を挙げる。

企画した体験プログラムを確認するために沖縄・神戸からのモデルツアーを製造したが、そのアクティビティ (体験プログラム) の候補には以下のものが含まれた。あさひかわ雪あかり、雪像・氷像制作、シットスキー (障がい者クロスカントリースキー (座位))、アイススレッジ氷上遊び、旭山動物園見学、旭川の歴史体験、アイスランタン製作、地域雪あかりバスツアー。

表 8-1 サービス提供者が備えるべき望ましいサービス水準 (抜粋)

検討項目	現状実施していること	サービス提供者が備えるべき望ましいサービス水準	備考 (*は補足説明)
公共スペース・トイレ	◎障害者トイレ Web マップにて所在地情報提供 ○手すり、スロープ等の設置	●誰でもトイレの設置 ●オムツなどを捨てる BOX やゴミ箱の設置 (普及指導体制未定)	*障害者トイレのアクセスが悪いツアールート沿線では、福祉施設に急用時の使用許可を打診 *地域内の福祉施設の障害者トイレの障害者の急用時への提供体制について未調整

(出所) 北海道運輸局、2008、『平成 19 年度国土施策創発調査 「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査」 調査報告書』(調査受託 シスコン・カムイ株式会社)、p.12.

以上の準備作業の上、モデルツアーを製造し、実施した。2008 年 1 月 20 日 (日) から 23 日 (水) の工程で、神戸から旭川へのツアーと沖縄から旭川へのツアーである。両者は、第 1 日目と第 4 日目の飛行機便が異なっていたが、21 日と 22 日は同じ行程であった。

(2) 体験交流プログラム (モデルツアー) の実施 (『2007 年度報告書』 pp.22-30)

概要は以下の通りである。

期間：2008 年 1 月 20 日 (日) から 23 日 (水)

参加者：神戸から 11 名。障害者 5 名、介助者 5 名、市役所から 1 名。

電動車いす利用者は、男 1 名、女 1 名、手動車いすは、男 1 名、女 1 名、
全盲は女 1 名。

沖縄から 3 名。WG 関係者による下見を兼ねて調査に参加。

行程：21 日 (月) は、旭山動物園、昼食 (そば)、ウエルカムパーティ。

22 日 (火) は、WG フォーラム、自由時間、旭川スイーツ、大雪アリーナで

カナダ対ノルウェー観戦（アイススレッジホッケー）、交流夕食会。

(3) モデルツアーから抽出された課題と改善点（『2007 年度報告書』 pp.31-35、pp.65-66、pp.78-85）

多数の課題が抽出され、また感謝の言葉も多く聞かれた。モニターの声、受け入れ側のサービス事業者など多数の記録が残された。モニターからの発言の例を挙げる。

- ・スケジュールなどに「どのくらい洋服を準備した方が良い」記載があっただけだった。
- ・今回のツアーは障害者にとっては体力的にきつく、ゆとりあるプランにしてほしかった。
- ・ホテル玄関の急スロープはこわかった。
- ・雪に不慣れで不安だったが車椅子「快適アクロ」（筆者注：雪道などの悪路向け車いす補助輪）に接し、雪道への強さに感心するとともに気持ち的に安定した。
- ・車いす用のトイレが寒く（手すりが冷たい）体温調整も大変だった。
- ・旭山動物ではボランティアの皆さんの親切な対応に感動した。
- ・対応してくれた人から受ける良い印象が一番旅の思い出として残る。旭川のみなさんの優しさに感謝している。
- ・全体にホテルの視覚障がい者に対する点字や音声によるガイドの配慮が欠けている。
- ・簡単に自己紹介は必要だったかも。
- ・「すぐ迎えに参ります」がすぐじゃなかった。

様々な経験があったが、「車いす紅蓮隊」の提案は、「ユニバーサルツアーの原則は、ゆったりできる滞在観光」「ゆったりプラン 訪れる場所を1日1～2個所にする」であった。
(4) 持続可能な運営体制のあり方の取りまとめ（『2007 年度報告書』 pp.36-38）

多方面にわたり検討が進められた。本研究の研究テーマとの関連で、特筆すべきは、「2 バリアフリースターセンターの展開方向」において、「旭川空港、JR 旭川駅、道の駅あさひかわ、旭山動物園等に誰にも優しい旭川の体験交流を案内できるバリアフリースターセンターの機能を持たせることが喫緊の課題として浮上してきた」と記されている（『2007 年度報告書』 p.40）。

(5) 北海道新聞の記事

2008 年 1 月 23 日付け北海道新聞の記事によれば、「二十二日、旭川大雪アリーナで開幕したジャパンパラリンピックのアイススレッジホッケー競技大会を、神戸市と沖縄県内の障害者ら十四人が観戦し、海外の一流選手のプレーに拍手を送った。・・・十四人は二十日に旭川入り。旭山動物園などを見学し、二十二日は市内のホテルで意見交換会も開いた。・・・開幕試合となったカナダーノルウェー戦に見入った。防寒着に身を包んで車いすで観戦した神戸市の竹林弥生さん（37）は「旭川の人たちは車いすの私たちに親切で、ホッケーも迫力満点」と笑顔。旭川の五十嵐真幸さん（21）も「面白かった」と話し、障害を感じさせない両チームの熱戦に声援を送った。」

なお車いす紅蓮隊ブログにも、このトライアルツアーで参加者につきっきりでお世話を

していた様子が詳細に報告されている。

8.3 旭川WGの活動（その2：2007年12月の神戸モニターツアーへの参加）

神戸WGが、モニターツアーを実施し、旭川からモニターとして参加した。その概要は、以下のようなものである。

神戸WGが、旭川の2班、沖縄の1班、関西の2班を受け入れた。

旭川の2つの班の参加概要は、近畿運輸局〔2008〕（資料8-3）によれば以下のようである。

「①旭川第1班：12月2日～5日、車椅子2名・高齢者1名・介助者3名。

※市内観光等、意見交換会、フォーラム開催

②旭川第2班：12月16日～19日、車椅子2名・介助者2名。

※スポーツ交流等、意見交換会開催」

旭川第1班には、車いす紅蓮隊の五十嵐と中村が、第2班には川村が参加した。2007年12月6日付け北海道新聞によれば、「旭川を訪れる障害者を増やすため、先進地の取り組みを学ぼうと、旭川の障害者ら六人が二日から五日まで、神戸を訪れた。・・・神戸では、地元のNPOが、障害者が楽しめる旅行ガイドを作るなど受け入れ態勢が整っていることから視察した。・・・神戸市内の公共施設や観光地を訪れ、障害者用のトイレが男女別に設置してある事例などを視察したほか、四日には神戸市内で行われたフォーラムに出席。買物公園で行った飲食店の入り口の段差の有無の調査など、日ごろの活動を報告し、交流した。」

このモデルツアーの様子は『2007年度報告書』（pp.95-107）に車いす紅蓮隊が「神戸モデルツアー派遣報告書」として報告し、また車いす紅蓮隊ブログに、多数の写真入りで詳細に報告されている。車いす紅蓮隊の感想は神戸では「車椅子のかたや障がい者の人が来ても非常に対応が慣れていて、こちらで質問をしなくてもきちんと誘導してくれ何も心配することが無かった」「身障者トイレも多くて施設もしっかり整っているのにはすごいな」と高い評価を与えている（『2007年度報告書』pp.61-62）。

8.4 旭川WGの活動（その3：2008年3月の自主ツアー）

自主ツアーとして、2008年3月18日から22日まで、五十嵐と中村が東京、鳥羽、沖縄を訪問したことが記録されている（『2007年度報告書』pp.108-114）。伊勢志摩BFTC、沖縄BFTCはいずれも日本のトップランナーのBFTCであり、学ぶことが多かったと思われる。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料 8－1）国土交通省国土計画局、2007、「平成 19 年度国土施策創発調査費の配分について」.

（資料 8－2）国土交通省総合政策局・北海道運輸局など、2008、『平成 19 年度国土施策創発調査 地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行 需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策検討調査報告書』。（HP に存在するが表紙・目次の みで本文は未見。国立国会図書館に蔵書なし）

（資料 8－3）近畿運輸局、2008、『（平成 19 年度国土施策創発調査） 地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた 地域活性化方策検討調査（障壁部会）』.

（資料 8－4）北海道運輸局、2008、『平成 19 年度国土施策創発調査 「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた 地域活性化方策検討調査」調査報告書』（調査受託 シスコン・カムイ株式会社）。（現存する報告書では一番詳しい。国立国会図書館に蔵書なし）

9 2008 年度・2009 年度経済産業省の「広域・総合観光集客サービス支援事業」の実施

9.1 平成 20 年度経済産業省の広域・総合観光集客サービス支援事業

経済産業省は 2007 年度から広域・総合観光集客サービス支援事業を実施し、旭川のコンソーシアム「大雪（DAISETSU）アダプテッドツアー創造推進コンソーシアム」は 2008 年度の第 2 次募集に応募して採択された。この事業の特徴は、2008 年度から 2010 年度の 3 年間の継続事業であることであり、単年度事業であった第 7 節の 2006 年度事業、第 8 節の 2007 年度事業とは相違する。2010 年度事業は実施される予定であったが、実施体制などの諸事情により 2010 年度事業は中止となった。本節では、2008 年度事業と 2009 年度事業の概要について、2008 年度事業の『平成 20 年度経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』（経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）[2009]、資料 9－1、以下、『2008 年度報告書』と略称する）と 2009 年度の『平成 21 年度経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』（経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）[2010]、資料 9－2、以下、『2009 年度報告書』と略称する）及び株式会社旭川産業高度化センターによる 2009 年度の事業報告『平成 21 年度「広域・総合観光集客サービス支援事業」事業名テイクオフ！！アダプテッドツアー交流拠点大雪（DAISETSU）コンソーシアム名大雪（DAISETSU）アダプテッドツアー創造推進コンソーシアム』（株式会社旭川産業高度化センター [2010]、資料 9－3）により記述する。

経済産業省の『2008 年度報告書』における「背景と目的」は、以下のようなものである（p.1）。「経済産業省では、「新経済成長戦略」において、多様化・高度化する顧客ニーズに応じて、

関連する事業者が業種横断・地域横断的に連携し、付加価値の高いサービス提供、新たな滞在価値の創出等、地域独自の魅力作りを行う産業を「観光・集客サービス産業」と位置づけ、積極的に支援を行うこととしている。

・・・

本補助金は、・・・具体的には特色ある地域の産業や工場、商店街、異業種等の幅広い事業者の連携など、観光・集客サービス分野において個別の事業者では対応が困難な立ち上がり期における共通基盤づくりを支援する。」

2008年度の広域・総合観光集客サービス支援事業においては、事業の選定は公募方式で行われたが、第1次公募で総計11件の応募があり3件が採択された。7月28日から8月11日に募集された第2次応募では、4件の応募があり、旭川のコンソーシアム「大雪(DAISETSU) アダプテッドツアー創造推進コンソーシアム」始め2件が採択された。複数以上の地域にまたがる事業者が連携しているか(広域性)と地域の特色ある産業や工場(地場産業・伝統産業等)、商店街等の幅広い事業者が業種を超えて参画し連携しているか(総合性)が、必須の要件とされた。

公募事業の事業主体(補助企業者)は、連携事業を行う連携体(企業、個人、大学、研究機関、NPO法人、組合等によるコンソーシアム)の代表者となるとされ、旭川の場合には、株式会社旭川産業高度化センターであった。コンソーシアムのメンバーは、他に旭川市、東川町、上川町の観光協会であった。

9.2 「テイクオフ!! アダプテッドツアー交流拠点大雪(DAISETSU)」の概要

以下、本節の基礎資料は、主に『2008年度報告書』(資料9-1)である。この資料によりコンソーシアム「大雪(DAISETSU) アダプテッドツアー創造推進コンソーシアム」の活動の概要を知ることができる。

(1) 事業の概要

事業プロジェクト名「テイクオフ!! アダプテッドツアー交流拠点大雪(DAISETSU)」の当初の概要は以下のとおりである。

事業プロジェクト名：テイクオフ!! アダプテッドツアー交流拠点大雪(DAISETSU)

コンソーシアム名：大雪(DAISETSU) アダプテッドツアー創造推進コンソーシアム

補助事業者名：(株) 旭川産業高度化センター

コンソーシアム構成地域(3地域)：旭川市、東川町、上川町(各観光協会)

事業期間：2008年9月から2011年2月

成果発表会：2009年3月16日から17日、東京の時事通信ホール(車いす紅蓮隊の五十嵐と中村が出席、車いす紅蓮隊ブログ2009年3月15日)

事業費：2008年度は2000万円(うち半額を経済産業省が補助)

表9-1 テイクオフ！！アダプテッドツアー交流拠点・大雪(DAISETSU)の
2008年度当初値と5年後目標値

目標項目	2008年度当初値	5年後目標値(2013年度)
ユニバーサル化したアクティビティ	圏域	圏域
冬季スポーツ系	7種類	8種類
夏季・インドアスポーツ系	8種類	12種類
ユニバーサル化した文化・癒し系施設		
旭川	旭川 7種類	旭川 10種類
上川	上川 0種類	上川 4種類
東川	東川 0種類	東川 5種類
宿泊施設における障がい者の宿泊数	2,600人	3,600人
アダプテッドツアー参加者数	0組	16組
圏域連泊率	19%	30%
あさひかわ・もてなしマイスター	0人	250人
ユニバーサルフードアドバイザー	0人	100人

出典)経済産業省商務情報政策局サービス産業課(観光・集客チーム)、2009、『平成20年度経済産業省
委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』p.107の表により筆者作成。

(2) 事業の目標

事業の目標は、以下のようなものである(表9-1参照)。(『2008年度報告書』p.107)
「大雪圏域の複数の観光資源に効果的なストーリーを持たせて組み合わせるとともに、障がい者やお年寄りを含めた誰にでも優しい「おもてなし」の行き届いた交流機会を大雪圏内に多数創出し、あらゆる人達が気軽に参加できる体験・交流型プログラムを提供できる体制(アダプテッドツアー交流拠点・大雪)の構築を図り、滞在型観光地に変化することを目的とする。

- ユニバーサル化したアクティビティ、各種イベント、観光・体験施設の充実
- 滞在客の拠点となる宿泊施設におけるバリアフリー体制の強化
- アダプテッドツアーによる検証 ○圏域における連泊率の向上
- あさひかわ・もてなしマイスターの養成 ○ユニバーサルフードアドバイザーの育成

(3) 事業の想定される効果

事業の想定される効果は、以下のようなものである。(『2008年度報告書』pp.107-108)
「現在旭川市を中心に、地域をあげて滞在交流に向ける「おもてなし」の普及が図られつつある。一部では、受入れ困難な冬季であっても、工夫をこらしながらそれらの障壁を取り除くことで、障がい者に滞在体験型観光を楽しんでもらう産学官連携の取り組みが進められており、全国的にも注目されている。ここでは障がい当事者の目線に医学・介護専門家の助言を加える事により、地域資源やプログラムのユニバーサル化がなされ、障がい者や高齢者などの広範な交流が促進されるなど、地域活性化の素地が整いつつある。

こうした良き先進事例を手本に協力を仰ぎ、地域住民自らが地元の資源を見直し、愛着を持って、広く大雪（DAISETSU）圏域の関係者が一同に取り組む体制を構築することで、四季にわたり、国内外からの障がい者はじめお年寄りだけでなく、誰にもやさしい「おもてなし」の行き届いた交流機会が創出され、障害の有無に関わらず、あらゆる階層の人たちが気軽に参加できる交流体験型の旅行の受け入れが推進されることにより滞在時間が増え、観光分野のみならず、関連する産業群への経済的な波及効果も期待されるものである。」

（４）事業実施の成果（2008 年度と 2009 年度）

多数の事業が実施された。2008 年度と 2009 年度の事業の定量的な成果を表 9－2 に掲載する。表 9－1 と比較すると事業が着実に進展してきたことが分かる。

アダプテッドツアー（トライアルツアーとも呼んでいた）の感想が北海道新聞 2009 年 2 月 11 日に掲載された。第 50 回旭川冬まつりの主会場の一つ常磐公園に、10 日、車いすの男性と視覚障害の女性が訪れた。「雪像を眺めたり、雪に触れたりしながら会場を散策し、アイスクャンドルに点灯した。視覚障害の女性（神戸市）は「周囲が広々としていて、大きさをを感じる。雪も踏み固められ、歩きやすい」と話していた。」という。

報告書における事業の定性的な評価のうち、主な項目は次の通りである。

・『2008 年度報告書』：情報提供事業においては、二つの事業を実施した。ひとつは、海外からの受入れに対するフィージビリティ調査である。本圏域の PR 及び調査を障がい当事者自ら行ったことは、台湾の旅行エージェントに対するインパクトは大きく、台湾から北海道に来る障がい者の旅行者への情報提供やアテンドも可能であることを理解してもらった。（p.110）

表9－2 テイクオフ！！アダプテッドツアー交流拠点・大雪（DAISETSU）の
2008年度当初値と2008年度・2009年度の成果

目標項目	2008年度当初値		2008年度・2009年度の成果	
ユニバーサル化したアクティビティ	圏域		圏域	
冬季スポーツ系		7種類		8種類
夏季・インドアスポーツ系		8種類		11種類
ユニバーサル化した文化・癒し系施設	旭川 上川 東川		旭川 上川 東川	
旭川		7種類		10種類
上川		0種類		2種類
東川		0種類		3種類
アダプテッドツアー参加者数		0組		10組
あさひかわ・もてなしマイスター		0人		37人
ユニバーサルフードアドバイザー		0人		23人

出典）経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）、2009、『平成20年度経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』のp.107の表及び
経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）、2010、『平成21年度経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』のp.89により筆者作成。

・『2009 年度報告書』：今回のトライアルツアーを実施した一連の成果としては、以下が紹介されている。実態の旅行形態：リトリブによる参加者全員が楽しめる旅行商品、障がい当事者自らが移動可能な旅行商品、集客期間の拡張：大雪圏（旭川・上川・東川）の通年型ユニバーサル仕様、連泊率を高める方策：地元でしか判らない地域密着型交流体験滞在型への変革。(p.89)

9.3 車いす紅蓮隊の活動と 2006 年度から 2010 年度までの成果

経済産業省の『2008 年度報告書』・『2009 年度報告書』と 2009 年度旭川産業高度化センターの事業報告（資料 9－3）においては、只石会長、吉田教授や車いす紅蓮隊の活動は、全く登場しない。同様に北海道新聞の記事にもほとんど登場しない。しかし実態としては、応募段階の企画案作成から、実施段階のアダプテッドツアー（トライアルツアー）の企画案作成と実施において、只石会長、吉田教授と車いす紅蓮隊は企画者あるいは実働部隊として大いに活躍した。

以上のように 2006 年度から 2010 年度までの全国的な委託事業においては企画・申請段階において只石会長と吉田教授が中心となり、実施段階においては只石会長、吉田教授及び車いす紅蓮隊始め多くの人々の協力があった。

この過程で、国の各省へ申請書を書く場合のノウハウと、モニターツアー製造のノウハウ、さらにモニターツアー実施のノウハウ、バリア調査（タウンウォッチング）の方法を大いに学ぶことができた。すなわち、これらの活動を通じてバリアフリーツアーセンターの基盤が整ったということができる。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料 9－1）経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）、2009、『平成 20 年度 経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』（国立国会図書館に蔵書があり）

（資料 9－2）経済産業省商務情報政策局サービス産業課（観光・集客チーム）、2010、『平成 21 年度 経済産業省委託事業 広域・総合観光集客サービス支援事業成果分析報告書』（国立国会図書館に蔵書があり）

（資料 9－3）株式会社旭川産業高度化センター、2010、『平成 21 年度「広域・総合観光集客サービス支援事業」 事業名テイクオフ！！アダプテッドツアー交流拠点大雪（DAISETSU） コンソーシウム名大雪（DAISETSU）アダプテッドツアー創造推進コンソーシウム』。

10 車いす紅蓮隊による露店出店（2007 年）とユニバーサルみこし（2009 年）

10.1 車いす紅蓮隊による露店出店（2007 年）

本節は、車いす紅蓮隊の地元旭川での活動記録である。障がい者自身の楽しみを増やすことがまずあり、障がい者の社会進出の意味があり、観光行事の魅力を高め観光資源を強化するなど、様々な意味がある。2006 年冬に始まった旭川冬まつり雪あかりのユニバーサル化のような優れた活動も併行して行われてきたが、本節の内容は、①お祭りに露店を出店（2007 年から）、及び②ユニバーサルみこしの開発とお祭り参加（2009 年から）である。

五十嵐は、2012 年 9 月発行の「ノーマライゼーション」に以下の記事を掲載した（五十嵐真幸 [2012]、資料 10 - 1、pp.16-17）。

「活動に取り組み始めた頃、いろいろな機会を利用して仲間の障がい当事者から聞き取り調査をしたところ、「人が集まるイベントにはあまり参加しない」という話を聞きました。

なぜ参加しないのか？ その理由を調べたところ、①人込みに入るのが大変。②車いすは目立つから嫌だ、③トイレがない（特に冬場の場合は大変）、という話がほとんどでした。「ホントはみんなと一緒に楽しみたいのに、動きづらいので参加できない」というのが本音でした。

では、人込みの中で動きづらい車いす利用者や高齢者が一緒に楽しめるようにするにはどうしたらいいのだろうか？ 関係者で話し合いを重ねました。・・・

そこで、私たち地元の障がい当事者が多くのイベントを企画し、参加してもらうことで多くの人とふれ合うことができ、自分たちのように車いす利用者の気持ちを知ってもらうことができると思いました。またイベントの企画に私たち車いす利用者が一緒に参加させてもらうことで身障者用トイレを設置してもらったり、車いすでどう楽しめるようになるか、関係者からも提案していただき、誰にもやさしい、一緒に楽しめる良いイベントができるようになってきています。」

「人が集まるイベントにはあまり参加しない」とは、筆者にとっては、日ごろ意識してこなかった当事者の発言で驚いた。また次ページあるように、「人込みは苦手」、車いすの目線からは「人の足しかみえない」。なるほどと思った。障がい当事者の気持ちが多くの人々に届くのを願い、また筆者もその言葉に耳を傾けたいと願う。

「人が集まるイベントにはあまり参加しない」という事実に対し、五十嵐たち車いす紅蓮隊は、お祭りに露店を出すという方策で障がい当事者の参加者を増やした。基礎資料は、資料 6 - 1 である。経過が大変にわかりやすいのでそのまま掲載する。

シート 16 の旭川観光社交組合の会長は、お祭りで露店の場所を仕切っている方であるという。車いすは場所が広い方が良いので、広い場所を仕切って、応援してくれた。「さんろくまつり」の「さんろく」とは旭川市 3 条通 6 丁目のことで、旭川の繁華街で観光名所の一つである。2022 年の第 43 回大雪さんろく祭りは 3 年ぶりに 8 月 4 日から 6 日に開

図 10-1 大雪さんろくまつりに露店を出店 (2007 年)

(出所) 五十嵐真幸・松波正晃・真鳥実佐子、2021、「障がいのある人の生活を支える環境づくりー誰にもやさしいまちづくりを目指した、障がい当事者の活動ー」、PDF ファイル、2021 年 11 月 16 日受領。

(資料 6-1) シート 16.

たくさんの人との出会いから



五十嵐

タウンウォッチングやバリア取材を通して、たくさんの人との出会うことができました。

自分たちのことを発信し、知ってもらうことで、「車いす」「障がい者」でもできることが多い、工夫次第で「できるが増える」と、一緒に考えていただけようになってきました。

そんなとき、「おまつり」が苦手という話を、旭川観光社交組合の会長さんにお話したことが1つのきっかけとなりました。



会長さん

おまつりは好きかい？

人混みは苦手なので
行く機会は少ないです



そうなのか～！そしたら
おまつりに行くのではなく
おまつりに参加するとい
いよ！
露店を出してみたら？



会長さん

車いす目線からでは、人の足しか
見えず、おまつりを楽しむ事が出来
ない……



実際の目線写真(撮影:五十嵐)

!!!!!!!!!!



(資料 6-1) シート 17.

さんろくまつりに露店出店 車いすの仲間が集まる場所

その年から、さっそく「さんろくまつり」に出店
車いすユーザーや地域の仲間がたくさん
協力していただきました。

初出店は2007年！現在も毎年出店しています



車いすだけではなく、健常者の仲間、
視覚や聴覚、知的障がいの仲間が出店しています。



車いすでも移動しやすいよう、販売できるよう
作業台の高さを低く、店舗内は移動できる
レイアウトに工夫

図 10-2 旭川夏まつりにユニバーサルみこしが出陣（2009 年）

（出所）五十嵐真幸・松波正晃・真島実佐子、2021、「障がいのある人の生活を支える環境づくりー誰にもやさしいまちづくりを目指した、障がい当事者の活動ー」、PDF ファイル、2021 年 11 月 16 日受領。

（資料 6-1）シート 18.

おまつり参加には…まだまだだねえ～



会長さん

おまつり楽しんでいるかい？でもまだまだだねえ～。最終日のみこしにも参加しなきゃだめだわ。使ってない「みこし」あるからもっていくねえ～

ん？みこしですか？
いやあ～；；；；；



有無も返事しないまま、
数日後……みこしがトラックで運ばれてきました。



車いすユーザーがみこしを担ぐと、移動ができず、座高低い人に重心が傾いてしまう。危険度高い。困った……やりたくない！！

地元企業の協力・アドバイスで
「台車」案、担がなくても担げるみこし！？
落下等、事故の危険性がなく
安全かつ、車いすでも楽しめる。



いやあ……。やめておくわ

開催日が近づき
仲間に声がけ！
反応は！？！？



（資料 6-1）シート 19.

いざ、出陣！！誰にもやさしいUDみこし



仲間達にも断られ、不安が大きく。。。露店でビールを振る舞うから遊びにきてえええ！と、声をかけ続ける

2009年 初出陣
いざ始まってみると、120名の参加者



Uhb
「石井ちゃんとゆく！」
2009年放送



2009年 UDみこしの先頭（拍子木）で
先導をとっていた車いす紅蓮隊メンバー。2019年8月の出陣時に、子供たちへ引き継ぐ

UDみこし
10th



2009年
～2018年



2019年～

子供から大人
障がいの有無に関わらず、
誰もが参加できるみこしと
なりました

2019年動画 YouTube



催された。さんろく界限に約 22 万人の市民・観光客の人手があったという。なお旭川夏まつりは、2022 年は 8 月 4 日から 7 日に開催されている。

このさんろくまつりに、2007 年から露店を出店し、以後毎年、出店を続けている。

10.2 ユニバーサルみこしの出陣

まつりに露店を出した後で社交組合の会長から「まだまだだねえ～。最終日のみこしにも参加しなきゃあだめだ。」と言われて、五十嵐は困った。そうしたら、数日後にみこしがトラックで運ばれてきた。社交組合が中心の実行委員会が、障がい者も参加できるユニバーサルみこしを企画し、五十嵐が勤めるシスコン・カムイが製作を担当することとなったのである。実行委員会が車いす紅蓮隊の活動に注目し、利用者目線での設計に携わることとなった。みこしの製作には、苦労があったが、多くの協力を得て完成した（図 10 - 2、シート 18）。十数基ある神輿の一つとして出陣した。

みこしが始まってみると参加者は約 120 名。車いす利用者はもちろん、視覚障害者、聴覚障害者も参加した。

五十嵐は、「ユニバーサルみこしは、主役。まつりの中で自由に動けるし、真ん中を堂々と歩ける。地元の車いすも、他地域の車いすも入ってきた。」という。2009 年 9 月 13 日北海道新聞記事の五十嵐の発言によれば、旭川夏まつりに初登場であったが、「車いす利用者にとって祭りの中心部に入ることは、相当なエネルギーが必要です。人込みに分け入る時はぶつからないように『すみません』と周囲に気をつけて進みます。車いすで足を踏んでしまい、怒鳴られた仲間も知っています。だから、祭りを敬遠する利用者は多いのです。みんなに応援されながら祭り会場を練り歩けた今回の経験は、そんな意識を変えられる第一歩になったかな、と思っています。・・・今回、みこしを担ぎながら見えた祭りのようすは、今までとは違う格別なものでした」。

なおユニバーサルみこしは、2011 年 10 月 8 日の沖縄県的那覇大綱挽きまつりにも出陣した。ユニバーサルみこしは現在も、カムイ大雪バリアフリー研究所の建物入り口に鎮座し、毎年の旭川夏まつりを待っている。

筆者は本節の取材で、障がい者の声を聞くことの大切さを学んだ。この先行研究の一例に、東京大学先端科学技術研究センターバリアフリープロジェクト [2004]（資料 10 - 2）があり、車いす当事者の他に、視覚障害者、聴覚障害者などの声が分かり、貴重である。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料 10 - 1）五十嵐真幸、2012、「北海道旭川市の魅力を満喫－カムイ大雪バリアフリースターセンターの取り組み－」、『ノーマライゼーション：障害者の福祉』、Vol.32、No.9、No.374、pp.16-19.

（資料 6 - 1：再掲）五十嵐真幸・松波正晃・真鳥実佐子、2021、「障がいのある人の生活を支える

環境づくりー誰にもやさしいまちづくりを目指した、障がい当事者の活動ー」、PDF ファイル、2021 年 11 月 16 日受領、28 ページ。

(資料 10 - 2) 東京大学先端科学技術研究センターバリアフリープロジェクト、2004、「< 座談会 > 体験 バリアフリーとまちづくり」、『地域開発』(日本地域開発センター)、No.479。

11 カムイ大雪バリアフリースターセンターの発足 (2011 年)

11.1 カムイ大雪バリアフリースターセンターの開設

2011 年 2 月 1 日に障がい者・高齢者のための着地型観光相談センターであるカムイ大雪バリアフリースターセンターが開所した (図 11 - 1 参照)。旭川市東旭川旭正のシスコ・カムイ内にある車いす紅蓮隊のメンバーが同じ事務所で業務を兼任した。当時の様子が 2011 年 2 月 2 日付北海道新聞朝刊 (旭川・上川、p.21) の記事「カムイ大雪フリースターセンター 障害者に旅事情報 市内に事務所 職員常駐、HP も」に掲載されたが、ここでは、当時の様子を只石会長、五十嵐センター長への取材によって記録したい。

開所に先立って、2010 年 10 月から最新のバリア情報を求めて、旭川市内のホテルや道の駅などでバリア調査を実施した。2011 年 1 月までに計 130 ヶ所を調査する予定という (北海道新聞 2010 年 11 月 26 日記事)。



(出所) カムイ大雪バリアフリースターセンター提供

図 11-1 カムイ大雪バリアフリースターセンターの開設当初のちらし

2月1日に開所式は開催されていない。また設立趣意書も作成されていない。事務所内部では、車いす紅蓮隊の通常の業務が行われていたようである。それには理由がある。第1に、街中のホテル・旅館、飲食店、交通機関のバリアー調査には、既に2006年から継続してタウンウォッチングで調査を続けてきており、旭川市を始め、近隣の施設情報は従来からよく知っている。第2に、この数年間の国の委託事業の実施で旅行の組み立て方の経験も積んでいる。第3に、何より、障がい者の旅行については、五十嵐、川村などの車いす当事者が常駐し、障がい者の事情がよく分かっており、利用者が安心して利用できる。

そこで、BFTCの業務の実態は、観光面でも福祉面でも設立前から既に十分に備わっていた、ということができる。只石会長は「2011年にバリアフリースターセンターを名乗った」と表現しているが、これは適切である。

11.2 発足当時のカムイ大雪バリアフリースターセンターの業務

発足当時のカムイ大雪 BFTC の業務内容は、2012 年版の『旅バリ』（資料 11－1）に掲載されている。本資料は発行年月が 2012 年 3 月であるので、2011 年 2 月の設立当時の内容とはほぼ同一と思われる。ほぼ全文を掲載する。最後に掲載された事業コンテンツの表をみると、BFTC の全ての基本機能に◎が付されており、充実した機能を最初から持っていたことがわかる。

「01 カムイ大雪バリアフリースターセンター

アクティブなスタッフが開拓 イベントも犬ぞり体験も
“したい”ことが叶えられる北海道

案内の対象エリア：北海道全域

住所：〒078－8368 旭川市東旭川旭正 315 番地 2

TEL：0166－38－8200

FAX：0166－38－8211

営業時間：9：00～17：30 土日祝定休

事業開始：2011 年～

雪が降ればバリアフリー？

過ごしやすい初夏の北海道も人気ですが、やはりおすすめするのは銀世界の冬。雪が積もれば、「普段は段差のところでも自然とフラットになるんですよ～」と、カムイ大雪バリアフリースターセンターの元気いっぱい紅蓮隊と呼ばれる車いすスタッフが笑いながら教えてくれました。雪慣れしていない車いす利用者に雪への注意事項や対策なども丁寧に教えてくれます。

アイススレッジホッケーやクロスカントリースキー、車いすカーリングなどの国際大会が



バリアフリー講座は、車いすスタッフが同行



座ったまま、寝たまま、それぞれの身体の状態に合わせて犬ぞりも楽しめる

(出所) 中村元・田中隆一・野口あゆみ、2012、『旅バリ』、日本バリアフリー観光推進機構、p. 19.

図 1 1 - 2 カムイ大雪バリアフリースターセンターの活動

開催される障がい者スポーツが盛んで、誰にもやさしい街としても注目されている旭川。この地のバリアフリースターセンターで特徴的なのは、アクティブな若い車いすスタッフたちが「自らが“したい”こと」を実践体験し、どんどん実現化してくれること。

たとえば毎年車いす参加者が 40 ～ 50 名は集まるといふ、旭川夏まつりの「UD 神輿」。神輿といってもただの神輿ではなく、足もとにコロがついて車いすでも担げる神輿なのです。みんな汗をかいながら笑顔で担いでいる姿が印象的。

イベントから犬ぞり体験まで

また、冬はもちろん、旭川冬まつりや雪あかり、氷瀑まつりのイベントもアイスクャンドル製作などで障がい者、高齢者が楽しめるバリアフリー化が進められています。

言わずと知れた問い合わせのトップの旭山動物園は、みなさん足を運ぶスポットのひとつ。坂は多いですが、車いすで快適に回れるルートをカムイ大雪で教えてもらえます。冬の場合は、雪道対策の秘密兵器アクロを有料で貸し出してくれるので、安心。

そして現在カムイ大雪のイチオシのアクティビティがバリアフリーの犬ぞり体験。真っ白い雪景色の中を犬に引かれて爽快に走るそりなんて憧れます。そのそりに立ったまま、座ったまま、寝たまま、それぞれの状態に応じて乗ってしまうのです。

これらもすべて、カムイ大雪バリアフリースターセンターのアドバイスにより生み出されたアクティビティ。いわば、獣道をつくり整備していく、そして、観光客のみなさんに楽しんでもらう。というまさに、「たのしいこと大好き」集団がカムイ大雪バリアフリースターセンターの紅蓮隊。なかなか体験できないことをここでは叶えられるのです。

もちろん遊びばかりではなく、地元事業所向けのバリアフリー研修や入浴介助のコーディネートも行い、日々のお客様の問い合わせに車いすスタッフ 3 名を含む 5 名が対応してくれています。

事業コンテンツ

◎	観光施設等のバリアフリー調査
◎	独自サイトからのバリアフリー情報発信
◎	人的介助サービス（介助のコーディネート）
◎	バリアフリー研修（宿泊施設、観光施設等）
◎	バリアフリーモニタリングツアー
◎	車いす、福祉機器の貸し出しサービス
◎	建物のバリアフリー改修アドバイス

【その他の独自サービス】

□雪道に対応できる車いす「アクロ」を貸し出し

11.3 日本バリアフリー観光推進機構に加盟

2011年7月に日本BF観光推進機構は設立された。奇しくも東日本大震災の当日2011年3月11日に全国十数団体が参集して「第1回全国会議」が松江で開催され、設立が決定された（伊藤薫〔2022〕、資料1－5参照）。カムイ大雪BFTCは、少なくとも2010年12月20日の第3回準備会には参加しており、設立当初のメンバーの一つになった。設立の詳しい経緯に関しては、伊藤薫〔2022〕（資料1－5）の第6節を参照されたい。

日本BF推進機構に参加したことにより、①機構の管理する「全国バリアフリー旅行情報」に参加し、旭川のホテル・旅館などのバリアー情報が全国共通基準で利用できるようになり、②毎年の全国バリアフリー観光フォーラムに参加し、③機構の発行する『旅バリ』に登場することになり、カムイ大雪BFTCの活動が全国的に知られることとなった。

<参考文献>（本文中の資料の掲載順による）

（資料11－1）中村元・田中隆一・野口あゆみ、2012、『旅バリ』、日本バリアフリー観光推進機構、pp.18-19.

（資料1－5：再掲）伊藤薫、2022、「バリアフリースターセンターの設立について（V）－松江／山陰バリアフリースターセンター－」、*Review of Economics and Information Studies*（岐阜聖徳学園大学経済情報学部紀要）、Vol.22、pp.17-57.

12 カムイ大雪バリアフリー研究所の発足（2011年）

12.1 カムイ大雪バリアフリー研究所の発足

第3節で述べたように2011年にカムイ大雪バリアフリー研究所が設立された。カムイ大雪BF研究所のNPO法人の設立認証年月日は2011年8月18日である。そして日本財団のCANPANによれば、カムイ大雪BF研究所の設立年月日は2006年6月1日とされており、車いす紅蓮隊の誕生とはほぼ同時期である。しかし北海道新聞などのマスコミには

2011 年まではカムイ大雪 BF 研究所の名前は登場しない。2011 年と同じ運営実態が 2006 年には既に成り立っていたということであろう。そして 2011 年には、カムイ大雪 BFTC に続いて、カムイ大雪 BF 研究所の内部組織として継続就労支援施設「チーム紅蓮」が設立された。只石会長と車いす紅蓮隊から始まった活動は、2011 年に大きな節目を迎えたことになる。

設立当初の役員構成をみると、建設デザイン設計業、大学教員、医師、旅行業、福祉用具制作、病院事務長、車いす紅蓮隊（4 名）と幅広い業種と障がい当事者からなっているが、これが研究所の成り立ちと性格をよく表している。

2011 年以降のカムイ大雪 BF 研究所、車いす紅蓮隊、カムイ大雪 BFTC、チーム紅蓮は、一層大きな活躍をするようになった。しかし 2011 年以降の活躍については、本稿では原則として触れない。また現在のカムイ大雪 BF 研究所の概要については、第 3.2 節で紹介した。

12.2 2018 年グッドデザイン賞にみる人々の想い・願い

これらの活躍を物語るものとして、近年、多くの賞を受賞している。その一例として、2018 年のグッドデザイン賞の受賞があり、その概要を紹介しよう（資料は、グッドデザイン賞 HP、<https://www.g-mark.org/award/describe/54518>）。カムイ大雪 BF 研究所などに参集した人々の実現してきたこと、彼ら彼女らの思い、願いを知ることができる。

「受賞対象名：障がい当事者がリードする優しいまちづくり [障がいの有無、老若男女、世代差、国籍の違いなど関係ない共生社会をめざし、障がい当事者がプロデュースするふれ合いイベントを企画運営し、誰にもやさしいまちづくりを進めます。]

事業主体名：NPO カムイ大雪バリアフリー研究所

分類：地域・コミュニティづくり

受賞企業：車いす紅蓮隊（北海道）

受賞番号：18G161239

受賞概要：2018 年度グッドデザイン賞受賞概要

概要：高れい者や障がい者と一緒に暮らし易い共生の地域づくりをめざし、一般的には地域で介護やサポートを受け、護られる立場の障がい当事者が前面に出て自ら企画運営するイベントを提案しながら、一緒に参加する障がい当事者仲間の人材育成と、周囲の人たちとの交流を深めることで誰にもやさしいまちづくりが進められる。具体的には、冬まつりや雪あかり、スキー大会、植樹、夏まつり、車いす御輿、バリアフルキャンプ、バリアフリーおもちゃ博、ポッチャ大会等のほか、車いすラグビーやパラクロカン、アイスホッケー、カーリング、テニス等パラスポーツ合宿や各種競技大会の招致、企画運

営にも直接関わっている。

プロデューサー：NPO カムイ大雪バリアフリー研究所 会長理事 只石幸夫

ディレクター：NPO カムイ大雪バリアフリー研究所 チーム紅蓮 川村徹他7名

デザイナー：NPO カムイ大雪バリアフリー研究所 チーム紅蓮 五十嵐真幸、真鳥実佐子、松波正晃

受賞対象の詳細

背景：地域の高校を卒業して社会人となり、職場のバリアフリー環境が整備されていない等の理由から安定した就労もままならず、異業種交流グループが取り組んでいた障がい者スポーツ振興の集まりに車いすを利用する障がい当事者として呼ばれて参加したことで地域の企業経営者との交流が始まりました。地域でもユニバーサルデザインやバリアフリーという言葉が出始めた頃で、その社会ニーズを満たすための役割が障がい当事者としての自分たちに与えられました。東京 2020 オリパラの影響からバリアフリー化の取り組みが促進され、地域内外からのバリアフリー化サポートへの要請が増加している。

デザイナーの想い：地域で巡り合い、ふれ合いの機会づくりに努め、フルシーズン、屋内外でのイベントを企画運営を通してたくさんの人たちとの同意と共感づくりが進められる。何かをしてもらうことを待つのではなく、地域ニーズを探りながら誰にもやさしい交流イベントを協創するように取り組んでいる。護ってもらう障がい当事者から脱皮して、積極的に前面に出て活動することで地域の一員としての認知を受ける元気な障がい当事者リーダーが育ってきた。10年前は一つのイベントにかかりきりだった体制が、複数のイベントに分かれて運営できるまで成長してきた。今後も真の共生社会づくりを目指して障がい当事者リーダーの輩出に努めることとする。

審査委員の評価：「車いす紅蓮隊（ぐれんたい）」は障がい当事者が組織する団体。北海道旭川市で 2006 年 4 月から様々なイベントを企画、NPO カムイ大雪バリアフリー研究所とともに運営している。審査会では当事者が様々なイベントをプロデュースしている点のほか、最近出版された料理のレシピ本が高く評価された。健常者の視点ではなく障がい当事者の視点で制作されている点、さらに事業化されれば独自財源になるという「仕組み」もすばらしい。」

12.3 今後の活動

今回の取材の過程で只石会長が 2011 年のカムイ大雪 BF 研究所の設立当時に「NPO を作ってやる。10 年間、面倒をみる。10 年経ったら俺はやめる。後は自分たちでやってくれ」と宣言したと聞いた。原稿執筆の 2022 年 10 月現在で既に 10 年を過ぎているが、只石会長は現在も会長である。

少なくとも、上記の「デザイナーの想い」にあるように現時点では「元気な障がい当事

者リーダーの輩出」が重要な課題であることは間違いのないところであろう。障がい当事者の運動が、障がい当事者本人によって実現し永続きすることが重要である。

13 まとめ：カムイ大雪バリアフリースターセンター設立の特徴

筆者はこのカムイ大雪 BFTC を含め 6 か所の BFTC について記録論文を書いてきた。他の BFTC と比較して、カムイ大雪 BFTC には際立った特徴がある。

特徴 1：カムイ大雪 BFTC は、2011 年 2 月の発足以前から BFTC の機能として既に十分な活動実績があり、その設立は BFTC の実態があるのに合わせて「BFTC を名乗った」ということである。

特徴 2：カムイ大雪 BF 研究所は、旭川市の企業経営者を主とする異業種交流から発展してきた。そのために発足当初の 2006 年からその構成メンバーは、建設デザイン設計業、大学教員、医師、旅行業、福祉器具製作、病院事務長、障がい当事者であった。BFTC の運営には、観光面と福祉面の連携が必要であるが、これが発足当初から実現していた。

特徴 3：発足当初から車いすの障がい当事者の若者が BFTC の中心で活躍した。これは重要な特徴である。カムイ大雪 BFTC では、旅行サービスの提供を障がい当事者が行ってきた。そこで提供するサービスの質において、当事者目線のサービスが実現してきた。

特徴 4：県庁・市役所の組織的関与が薄かった。それだけ異業種交流の民間パワーが大きかったということであろう。この点は、石川 BFTC に類似しており、三重県庁の伊勢志摩再生プロジェクトから始まった伊勢志摩 BFTC、沖縄県バリアフリー観光推進事業から生まれた沖縄 BFTC とは全く性格が相違する。

特徴 5：単独の NPO ではなく、母体となる NPO の内部で運営されている。これは沖縄 BFTC と同一であり、単独 NPO である伊勢志摩 BFTC と相違する。

最後に本研究を続けてきた筆者の感想を記したい。

只石会長は「優れた導き手、教育者」であると感じた。車いすの若者達の面倒を十数年にわたって見続けてきたことになるが、その面倒見のエネルギーは計り知れない。その原動力は何であろうか。只石会長は「巡り合い、知り合い、触れ合いを重ねるうちに、一緒に仕事ができる仲間たちと確認できた」「彼らがやってゆける器をつくりたい」という。

一方で、五十嵐はじめ車いす紅蓮隊の若者たちは、社会や仕事を何も知らない状態から、十数年で BFTC、研究所、チーム紅蓮の仕事がこなせるように成長した。五十嵐は「今一番行きたいのは、同じような想いを持った障がいの仲間と一緒に、より地域で必要としてもらう活動を行ってゆきたい」という。

車いす紅蓮隊の誕生から現在までは、若者たちの人材育成は成功したと思われる。今後は、永続が必要であり重要である。バリアフリースターセンターの仕事でも、チーム紅

蓮の仕事でも、一人でも多くのメンバーが社会人として働く経験を積み、更に障がい当事者リーダーへ成長なさるように期待したい。

（取材記録）

対面取材は、以下のようなものである。

- ・2021年11月26日：旭川市総合政策部政策調整課、カムイ大雪 BFTC
- ・2022年9月28日から29日：旭川市観光課・旭川観光コンベンション協会、旭山動物園、カムイ大雪 BF 研究所・BFTC、旭川市スポーツ課、産業振興課、旭川医科大学